

# 平安京左京八条二坊十五町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 平安京左京八条二坊十五町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびマンション新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

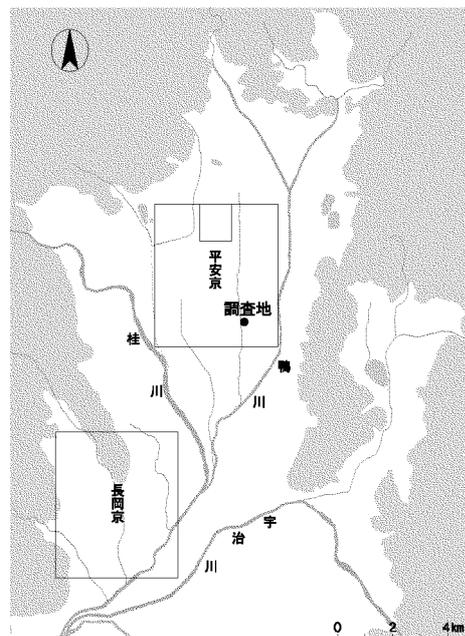
平成16年4月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京八条二坊十五町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区油小路通木津屋橋下る北不動堂町522番 1
- 3 委 託 者 株式会社 礎 代表取締役 杉森 実
- 4 調査期間 2003年11月10日～2004年 2月19日
- 5 調査面積 350m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 網 伸也・近藤知子
- 7 使用地図 図 1 は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当者
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 17 本書作成 網 伸也
- 18 編集・調整 児玉光世・清藤玲子・大立目 一
- 19 調査協力者 鑄造関係遺構および遺物に関しては久保智康氏（京都国立博物館）の御教示を得た。
- 20 金属の分析 鉄塊の分析は堀場製作所に依頼した。



（調査地点図）

# 目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	2
3 . 遺 構	5
( 1 ) 平安時代中期以前の遺構	5
( 2 ) 平安時代後期から鎌倉時代の遺構	8
( 3 ) 室町時代の遺構	9
4 . 遺 物	14
( 1 ) 平安時代中期以前の遺物	14
( 2 ) 平安時代後期から鎌倉時代・室町時代の遺物	15
5 . ま と め	27

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	平安時代から鎌倉時代遺構平面図 ( 1 : 200 )
図版 2	遺構	室町時代遺構平面図 ( 1 : 200 )
図版 3	遺構	建物 1 ・ 2、柵 5 ・ 6 実測図 ( 1 : 100 )
図版 4	遺構	1 建物 4 ・ 5、炉群平面図 ( 1 : 50 ) 2 炉群 B ( 炉 4 ~ 6 ) 実測図 ( 1 : 20 )
図版 5	遺構	炉群 A ( 炉 1 ~ 3 ) 実測図 ( 1 : 20 )
図版 6	遺構	井戸 1 ・ 3 ~ 7 実測図 ( 1 : 50 )
図版 7	遺構	土壌 1 ・ 5 ~ 8 ・ 11 実測図 ( 1 : 50 )
図版 8	遺物	平安時代中期以前、井戸 1 ~ 3、土壌 2 ~ 4 出土土器実測図 ( 1 : 4 )
図版 9	遺物	建物 2 整地土、埋甕、溝 1、建物 4 整地土、炉群 A 地業、炉東炭層出土土器実測図 ( 1 : 4 )
図版 10	遺物	井戸 5 ~ 7 出土土器実測図 ( 1 : 4 )
図版 11	遺物	土壌 7 ~ 13、肥溜 1 ・ 2 出土土器実測図 ( 1 : 4 )
図版 12	遺物	鑄造関係遺物実測図 ( 1 : 4 )
図版 13	遺構	1 第 1 区平安時代から鎌倉時代遺構面全景 ( 西から ) 2 建物 1 および柵 2 ( 北から ) 3 井戸 1 ( 北から )

- 図版14 遺構 1 第3区平安時代から鎌倉時代遺構面全景（東から）  
2 第2区平安時代から鎌倉時代遺構面全景（北東から）  
3 井戸3・4（南から）
- 図版15 遺構 1 第1区室町時代遺構面全景（北西から）  
2 埋甕（北から）  
3 建物2内焼土壇（北東から）
- 図版16 遺構 1 第1区室町時代遺構面東半部全景（西から）  
2 土壇6（南西から）  
3 土壇7・8（北西から）
- 図版17 遺構 1 第2区室町時代遺構面全景（東から）  
2 第3区室町時代遺構面全景（東から）
- 図版18 遺構 1 炉群A地業および炉群B検出状況（南東から）  
2 炉1（南から）  
3 井戸5・6（東から）
- 図版19 遺物 土壇2・3出土土器
- 図版20 遺物 建物4整地土、炉群A地業、炉東炭層出土土器
- 図版21 遺物 井戸5～7出土土器
- 図版22 遺物 土壇9出土土器
- 図版23 遺物 1 白磁椀・皿  
2 白磁壺類
- 図版24 遺物 1 青磁椀・皿  
2 白磁椀・皿  
3 青磁杯・鉢・椀
- 図版25 遺物 1 青白磁壺・合子  
2 輸入陶器盤・壺
- 図版26 遺物 1 滑石製鍋  
2 砥石
- 図版27 遺物 1 銭貨  
2 青銅製飾金具  
3 鉄製品
- 図版28 遺物 1 埴塼  
2 土師器転用埴塼  
3 土器形鉄塊
- 図版29 遺物 1 刀装具鋳型  
2 筭・不明品鋳型

- 図版30 遺物 1 鏡背面鑄型  
 2 方形板鑄型  
 3 鏡鑄型
- 図版31 遺物 1 私鑄錢鑄型  
 2 小椀鑄型  
 3 ひさげ鑄型
- 図版32 遺物 1 鉄滓  
 2 埴

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図(1:2,500)	1
図2	調査前全景(北西から)	2
図3	調査風景	2
図4	平安京左京八条二坊十五町発掘調査地配置図(1:1,000)	3
図5	第1区西壁および第2区西壁断面図(1:50)	6
図6	平安時代中期以前遺構平面図(1:200)	7
図7	土壌2土器検出状況(北東から)	9
図8	埋甕実測図(1:50)	10
図9	肥溜1・2実測図(1:50)	13
図10	土壌1出土「承和昌賣」	15
図11	土壌5出土土器実測図(1:4)	16
図12	溝2出土土器実測図(1:4)	19
図13	石硯	22
図14	鉄製品実測図(1:4)	22
図15	土壌11出土土器形鉄塊実測図(1:4)	23
図16	鑄造関係遺物(埴塼・羽口・炉構築材)	24
図17	刀装具鑄型側面刻み目	24
図18	軒瓦拓影・実測図(1:4)	25
図19	遺構変遷図(1:600)	29

# 表 目 次

表 1	遺構概要表 .....	5
表 2	遺物概要表 .....	14
表 3	輸入陶磁器出土地点表 .....	21
表 4	石製品・金属製品・鉄滓・埴出土地点表 .....	26

# 平安京左京八条二坊十五町跡

## 1. 調査経過

当調査地はJR京都駅の西北西約400m、現在の塩小路通から油小路通をやや北へ行った東側に位置する。調査地の東側のJR京都駅周辺は、平安京東市の衰退に伴って平安時代後期から七条町として商工業が栄えた地域であり、また八条院町として鎌倉時代から室町時代にかけて様々な職能をもつ人々が集住した地域であった。実際に過去の発掘調査でも、鏡・仏具・刀装具など鑄型や炉跡、あるいは多量の漆器廃棄土壌などを検出しており、銅細工師や塗師たちの盛んな活動の痕跡を確認している。当調査地でも中世職能民に関係する遺構の検出が十分予測でき、油小路に面した人々の生活痕跡を明らかにすることを目的として調査を行った。

発掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターの指導に基づいて、約250㎡の逆L字形の調査地（第1区）を設定し、平成15年11月10日より重機掘削を開始したところ、地表下1mほどの深さで中世の遺構面を良好に検出した。第1区は推定油小路から約30m中に入った地点であり、中世における町内中央部の土地利用が明らかになるとともに、油小路から通じる辻子状の遺構の存在が想定できた。また、調査区の西端で多量の鑄型が出土したため、西側の油小路に面した場所での鑄造関係遺構の存在を予測することができた。さらに下層では遺構密度は低いが平安時代まで遡る

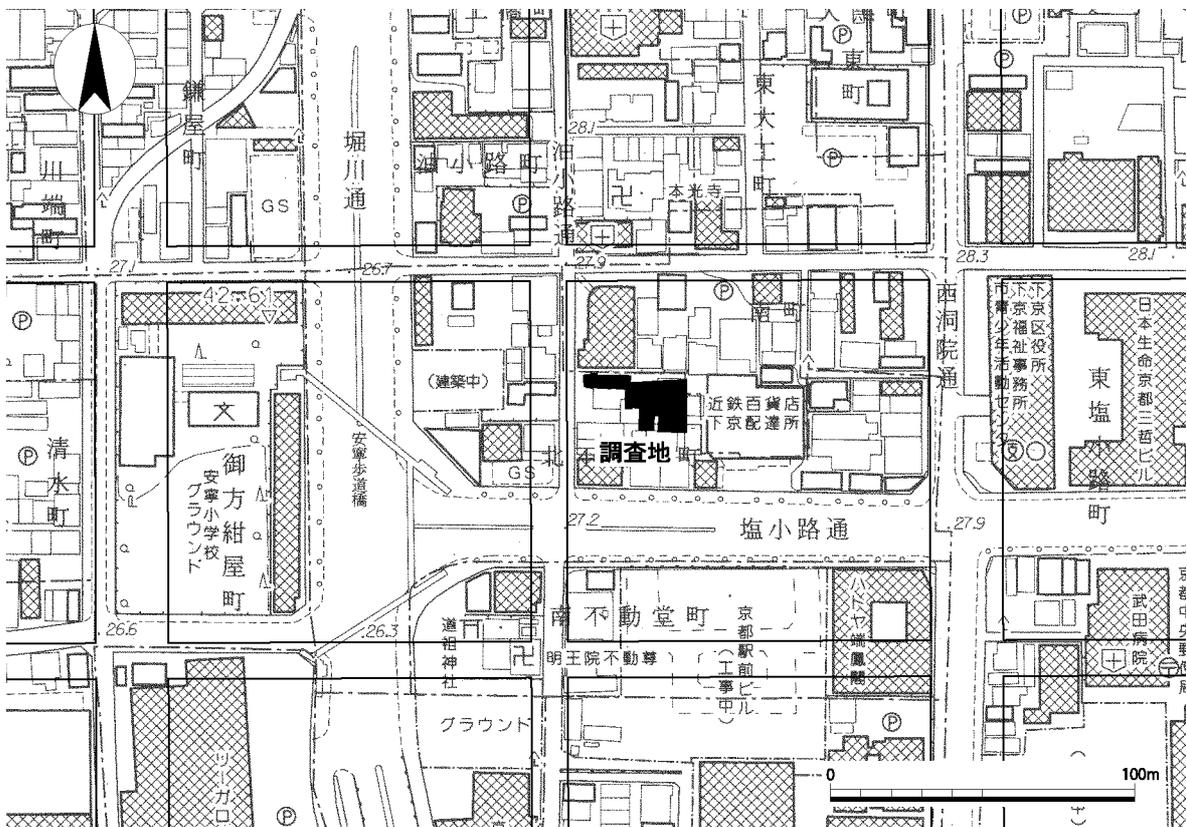


図1 調査位置図(1:2,500)



図2 調査前全景（北西から）



図3 調査風景

遺構も確認した。これらの遺構の記録作業を行い、平成16年1月9日に第1区の調査を終えた。

ところで、第1区の調査で油小路側に鑄造遺構が存在する可能性が高まったため、原因者と協議のうえ第1区の西側と南西部を拡張し、調査を行うこととなった。第2区は南西部で設定した約40㎡の調査区で、辻子の実態を明らかにすることを目的とした。また、第3区は油小路に面した場所での遺構のあり方を明らかにすることを目的として、東西に細長く約60㎡の調査区を設定した。これらの拡張調査は、平成16年1月13日に第1区の埋め戻しと並行して重機掘削を開始し、予想通り良好な状態で中世の遺構群を検出することができた。第3区では油小路に面して、鏡生産や刀装具生産など銅細工師の活動の痕跡を確認し、関連遺構として炉跡を多数検出するとともに、廃棄土壌からは鑄型の出土が多くみられた。また、第2区では辻子路面を確認し、中世においてもある程度四行八門に規制されて、土地区画や辻子などが形成されていることが判明した。第2区・第3区ともに記録作業を個々に行い、平成16年2月19日にすべての作業を終了した。調査中の排土はすべて場内処理している。

対象調査面積は拡張区も含めて最終的に約350㎡となったが、当初の目的であった鑄造関連遺構を油小路に面して検出でき、銅細工工房の西への広がり方を再確認することができた。なお、平成15年12月12日に地元住民を対象とした現地説明会を開催し、約30名程の参加があった。

## 2. 位置と環境

当調査地は平安京左京八条二坊十五町に相当し、平安京東市の南東に位置する。平安遷都以来、京の経済活動の基盤として機能した東西市は、10世紀には右京の衰退に伴い西市の機能が低下し、東市周辺での経済活動が中心になったとされる<sup>1)</sup>。しかし、平安時代中期の東市周辺での活発な経済活動を示す痕跡は、考古学的にはまだ確認できておらず、市外町の形成の問題も含めて今後の課題とされている<sup>2)</sup>。むしろ、七条大路など主要路に面した家地に付属するかたちで私的な商業活動が成立してきたと考えられており、東市の衰退に伴って経済的中心としての七条町が成立する契機もこのような市周辺での私的経済の活発化にあると想定できる。

七条町は七条大路と町小路の交差点を中心として、その周辺域に広がった商工業地域である。

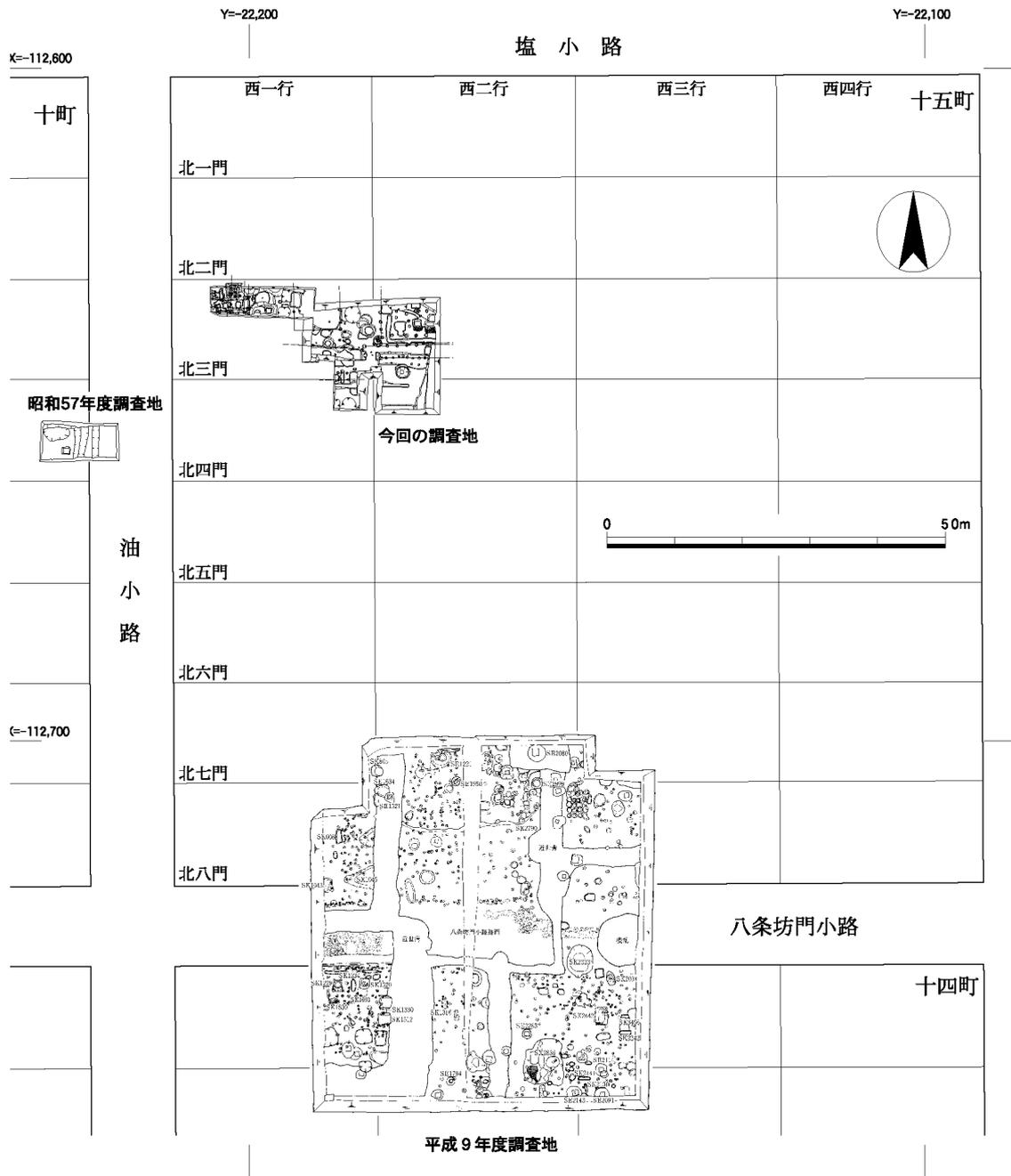


図4 平安京左京八条二坊十五町発掘調査地配置図(1:1,000)

12世紀にはその成立が認められ、鍛冶・鋳物師や金銀細工などの職能民や借上などの金融関係者が多数集まって活動していたようである。平安時代末期には平清盛の西八条第や暲子内親王の八条女院御所の造営など、八条大路に面して多くの邸第が造営されており、これらの邸第の造営と七条町の隆盛が密接に関わっていたことは充分想定できよう<sup>3)</sup>。また、女院御所が衰退した後も、八条院町として鎌倉時代から室町時代にかけて様々な職能をもつ人々が集住した地域であった。広大な敷地を持つ八条院領は代々皇室が伝領するが、解体後は女院御所関連の敷地の大半が東寺の所有になる。東寺に施入された6年後の元応元年(1319)6月の『八条院町年貢帳』(『東寺百合文書』へ-38)では、室町小路や烏丸小路に面して多くの請人が登録されているが、その中に

は番匠・薄(箔)屋・完(椀)屋・塗師・丹屋・金屋などの手工業者が記入されている<sup>4)</sup>。七条町とともに八条院町が、中世においていかに商工業が盛んであったかが窺える。

このような中世における生産活動の痕跡は、発掘調査においても確認できる。七条町周辺では左京八条三坊二町や七町で鎌倉時代に遡る刀装具や仏具の鋳型が多く出土しており<sup>5)</sup>、八条院町では室町小路に面する建物群と鋳造炉を良好に検出するとともに鏡・仏具の鋳型が多量に出土した<sup>6)</sup>。これら商工業地域の西への広がり油小路周辺まで及ぶことは明らかで、平成9年度には当調査地の南で発掘調査を行っており、八条坊門小路と路の南北に展開する鋳造関連遺構や鏡・私鋳銭の鋳型などを良好に検出した<sup>7)</sup>。また、当調査地と油小路を挟んだ向かいである十町東面でも、石敷きに整地された油小路路面と鋳造関係遺物が出土している<sup>8)</sup>。

なお、遺跡の盛衰であるが、この地域での遺構は13世紀から15世紀前半が中心となり、16世紀には確実に耕作地へ変化するようである。文献資料からみても、八条院町では15世紀末には「院町庄」と史料に記載されるようになる。16世紀末になって京都七条坊門堀川の地に本願寺が寺地を寄進され、伽藍と寺内町を構成するにおよんで、ようやくこの地域も寺内町の南辺として再び町が整えられたのである。

#### 註

- 1) 脇田晴子「王朝の経済生活」『京都の歴史1 平安の新京』 学芸書林 1970年
- 2) 萩本 勝「調査の成果と課題」『左京七条一坊十三町 平安京東市外町の調査』 平安中・高等学校 1985年
- 3) 臈谷 寿「文献にみる遺跡周辺の様相」『平安京左京八条三坊二町』平安京跡研究調査報告代6輯 (財)古代学協会 1983年  
同「文献学的考察」『平安京左京八条三坊二町 - 第2次調査 - 』平安京跡研究調査報告代16輯 (財)古代学協会 1985年
- 4) 仲村 研「八条院町の成立と展開」『京都「町」の研究』 法政大学出版社 1975年
- 5) 『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年  
註3 報告書
- 6) 網 伸也ほか「平安京左京八条三坊2」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 7) 鈴木廣司「平安京左京八条二坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 8) 堀内明博・百瀬正恒・吉村正親「左京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年

### 3 . 遺 構

調査地は現状では近代から現代の盛土のため平坦となっており、G.L.-0.8~0.9mまでこの現代盛土と近代整地土を除去すると江戸時代の耕作土層である暗褐色～黒褐色砂泥層となる。この耕作土層は北では約0.2mと薄い、南では約0.4mと厚く堆積しており、調査を開始した上層遺構面（室町時代遺構面）では緩やかに南に下がる地形となっている。下層遺構面（平安時代から鎌倉時代遺構面）は0.1～0.3mの厚さで堆積した黒褐色砂泥層の下層で検出しており、標高は最も高い北西部で26.3m、最も低い南東部で25.8mである。この面で平安時代後期から鎌倉時代の遺構を検出したが、同一面で平安時代中期以前の遺構も少ないながら確認している。基盤となる地層は黄褐色～灰黄褐色砂礫で、第1区では北西から南東に流れる流路状堆積を確認している。この流路状堆積は須恵器や土師器小片を包含しており、古墳時代に形成されたと考えられるが、遺物が極端に少なく時期決定は困難である。埋土は基盤層と同質の砂礫層で、最上層では部分的ではあるが平安時代に整地がなされている。

#### ( 1 ) 平安時代中期以前の遺構 ( 図 6 )

下層遺構面で検出した遺構群のうち、平安時代中期以前に遡る遺構は柵1条・土壇1基と旧流路のみで非常に少ない。

柵1 第1区で検出した南北方向に並ぶ3基の柱穴列である。南北への延長あるいは東西への展開を示す柱穴を確認していないため、2間分の柵として認識しておく。柱間は約2.1m（7尺）

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代中期以前	柵1	南北方向の掘立柱穴2間分。
	土壇1	承和昌寶が出土。井戸の可能性が高い。
	旧流路	流路は古墳時代の遺物を包含。平安時代に整地。
平安時代後期～鎌倉時代	建物1	掘立柱構造で根石をもつ。
	柵2～4	町内を区切る柵。西一行・西二行界に対応。
	井戸1～4	小宅地分割に対応して分散。
	土壇2～5	土壇3・5から鑄造関係遺物が出土。
室町時代	建物2～5	油小路面の建物と中央域の建物に分かれる。
	埋甕	建物2南西部に設置。
	柵5～8	四行八門に規制された柵。
	溝1・2	建物群の南を区切る。西一行・西二行界に土橋。
	路面	油小路から通じる東西辻子。
	井戸5～7	油小路面の建物に対応する井戸。
	土壇6～13	土壇10から鑄造関係遺物。土壇11から鑄鉄関係遺物。
	炉1～7	炉群Aと炉群Bに分かれる。炉群Aは建物4に対応か。
肥溜1・2	町内建物の衰退後の畠化に伴う遺構。	

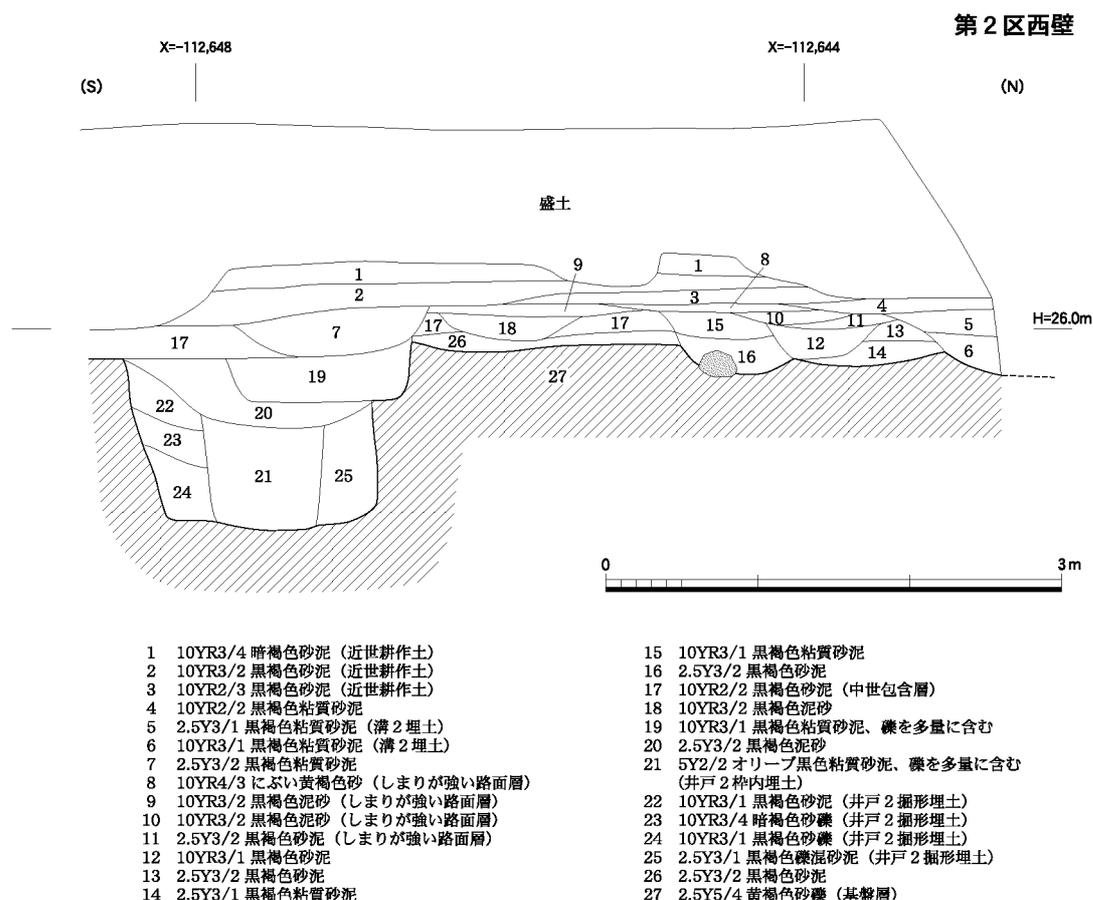
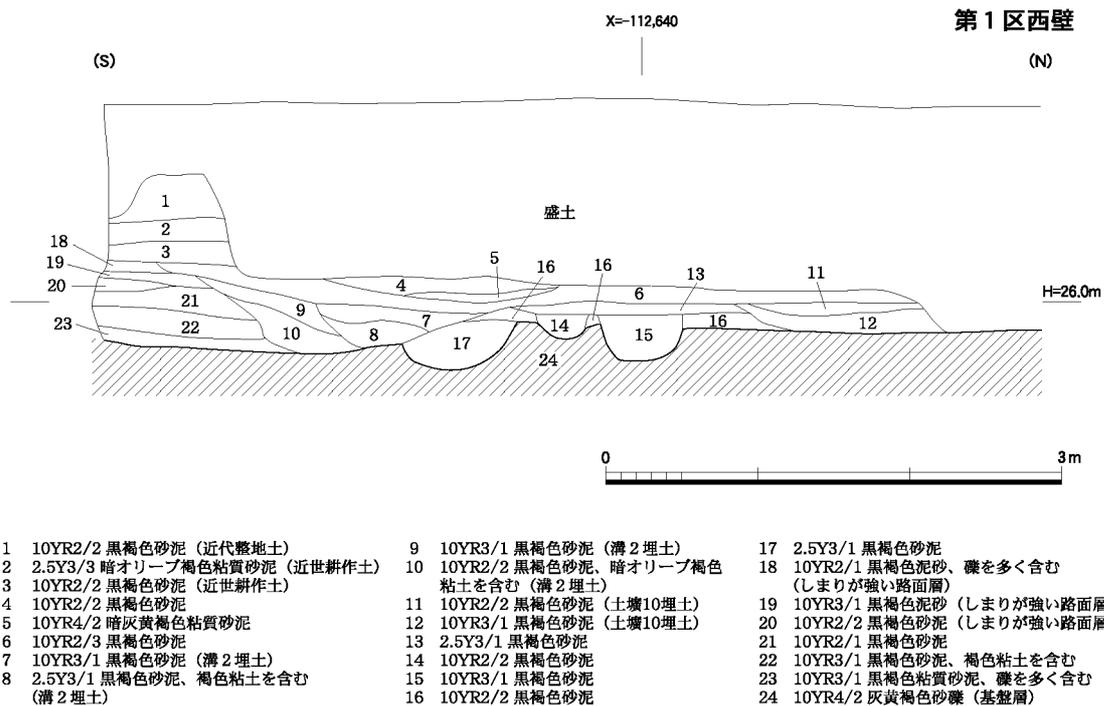


図5 第1区西壁および第2区西壁断面図 (1:50)

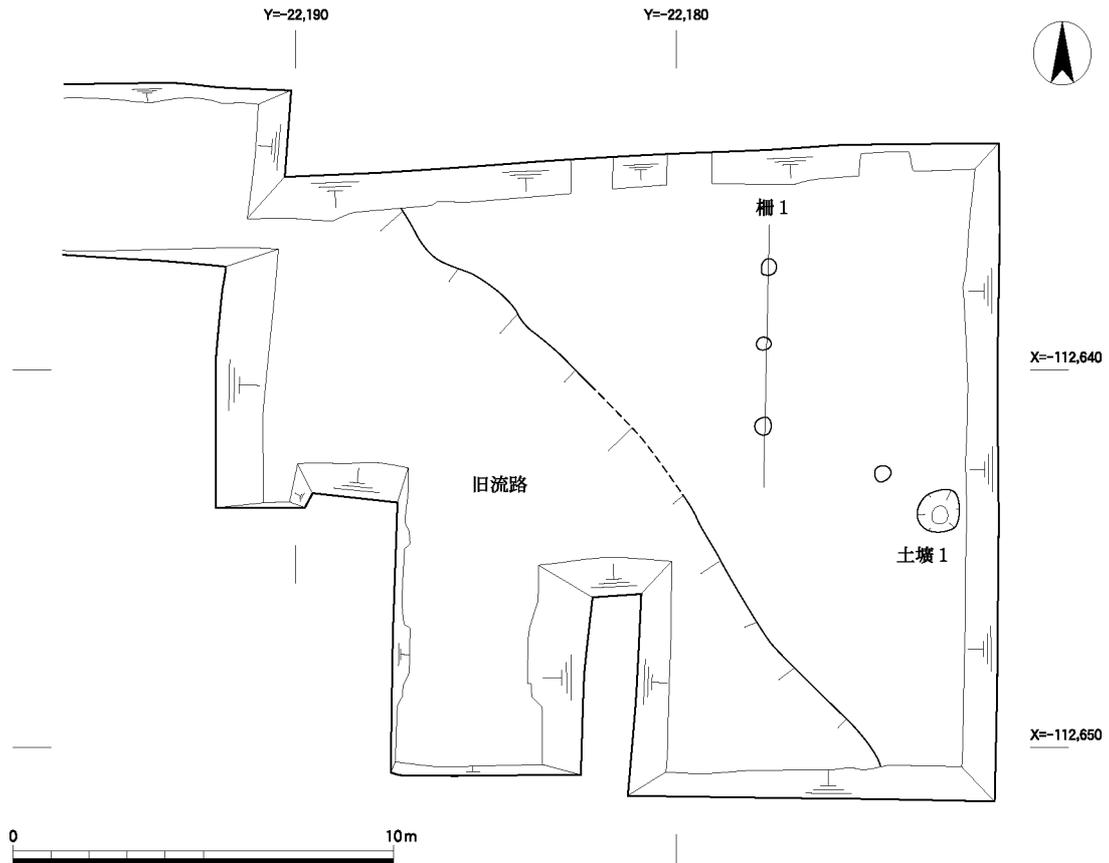


図6 平安時代中期以前遺構平面図(1:200)

等間で、北に対して東へ約 $1^{\circ}$ 振っており、 $Y=-22,177.6 \sim -22,177.7$ ライン上に位置する。柱穴は直径0.4m前後の円形を呈するが、柱痕跡は確認できなかった。埋土から平安時代中期の土器が出土している。

土壇1(図版7) 第1区東端で検出した、やや方形を呈した土壇である。東西約1.05m、南北約1.15mと南北にやや長い形状で、深さは検出面から約0.4m、底部標高25.2mである。水平堆積を示し構造物などの痕跡は認められなかったが、井戸である可能性が高い。埋土には平安時代中期の遺物を多く包含しており、ほぼ完形の須恵器壺も出土している。また、底から「承和昌寶」が2枚出土している。

旧流路 調査区を北西から南東に流れる流路痕跡である。北東肩部を第1区で確認したが、南西肩は確認できていない。推定幅10m以上になると考えられる。深さは約0.8mで、堆積層は地山とよく似た黄灰色砂礫である。埋土から少量ながら古墳時代の土師器や須恵器が出土している。また、旧流路上の落ち込み部を平安時代に整地したようで、黒褐色砂泥層が0.1~0.2mの厚さで堆積していた。この整地土内からは、注目すべき遺物として緑釉陶器耳皿や土馬などが出土している。

## ( 2 ) 平安時代後期から鎌倉時代の遺構 ( 図版 1 ・ 13 ・ 14 )

下層遺構面で確認した大半の遺構がこの時期に形成されたものである。検出した遺構は、建物や柵の柱穴・井戸・土壇などである。時期としては土器型式から12世紀後半から13世紀後半にかけての時期が想定できる。

建物 1 ( 図版 3 ・ 13 ) 第 1 区北東部で検出した掘立柱建物で、東西 3 間 ( 7.4m ) 以上、南北 1 間 ( 2.1m ) 以上を確認した。東西柱間は 8 尺等間、南北柱間は 7 尺で建てられたと考えられるが、建物の東および北側が調査区外に展開するため規模は不明である。柱穴は径約 0.4 ~ 0.5m の円形を呈し、柱痕跡は確認できなかったが南側柱列の 3 箇所根石を確認した。建物の振れはほぼ真北である。

柵 2 ( 図版 13 ) 建物 1 の南側柱列から南へ約 2.8m の位置に設けられた東西柵である。柱穴が同位置で重複しており複数の建て替えが想定できるが、個々の柵の柱穴を同定できない。柱穴は不整形円で直径 0.3 ~ 0.5m と一定でなく、柱間も不揃いと考えられる。建物 1 の西側柱列の南延長部 ( Y = -22,182 ライン ) で途切れるようで、東側は調査区外に延長する。X = -112,639.6 前後に位置し、西に対して南へ若干振れるようである。

柵 3 柵 2 の西端部から南へ約 1 m ずれて西へ延長する柵である。柵 2 と同様に柱穴が重複し、西側は調査区外に延長する。柱穴は直径 0.3 ~ 0.4m の不整形円で、根石が据えられているものもある。X = -112,640.5 前後に位置し、西に対して約 1 ° ほど北に振っている。なお、柵 2 と柵 3 の境界は西一行と西二行の境界にほぼ合致している。

柵 4 第 3 区で検出した東西柵である。柱穴は直径 0.3m 前後の円形で、柱間は不揃いである。西は Y = -22,200 付近で途切れ、東は調査区外に延長する。X = -112,634.3 前後に位置し、東に対して若干北に振っている。

井戸 1 ( 図版 6 ・ 13 ) 柵 1 の南約 3 m に穿たれた井戸である。掘形は一辺約 1.5m で、木枠は残存していないが断面観察から一辺 1 m 前後の方形井戸と考えられる。また、底部には直径約 0.5m の曲物を据えた痕跡が遺存していた。底部標高は 24.76m である。

井戸 2 第 2 区西壁で検出した井戸であるが、大半が調査区外となり詳細は不明である。井戸枠は残存していないが、枠内と考えられる埋土には多量の礫が廃棄されている。掘形の一辺は約 1.6m の方形を呈し、枠の規模は断面観察から約 0.75m と推定できる。井戸枠は方形か円形かは明らかでない。柵 2 から約 7 m 南に穿たれており、井戸底部の標高は 24.68m である。

井戸 3 ・ 4 ( 図版 6 ・ 14 ) 第 3 区西端部で検出した方形井戸群である。井戸 3 は掘形約 2.3m で、井戸 4 を壊して穿たれている。木枠が残存しないが平面形態や断面観察から一辺 0.9m 前後の方形井戸であったと想定できる。井戸枠内下層には井戸 2 と同様に多量の礫が廃棄されていた。底部標高は 24.28m である。井戸 4 は井戸 3 の北に接して検出した方形縦板組み井戸である。底部にかろうじて方形縦板組み木枠の痕跡を残していたが、遺存状況は悪く横棧は確認できなかった。掘形規模は井戸 3 に壊されており明らかでないが、木枠は一辺約 0.7m で、底部標高は 24.64m で

ある。

土壌 2 ( 図 7 ) 第 1 区南東隅で検出した不整形な土壌で南側大半が調査区外となる。東西幅は確認できた範囲で約 1.8m、深さ約 0.3m で、上層に完形の土器群を多量に包含していた。

土壌 3 柵 3 の南で検出した南北に細長い土壌である。南北約 4.9m、東西約 1m で、深さは約 0.3m である。刀装具鋳型や埴塼などの鋳造関係遺物が多量に出土している。

土壌 4 柵 3 の北側で検出した、東西約 2.5m、南北約 1.3m の土壌である。深さ約 0.6m で、壁面はほぼまっすぐに立ち上がる。包含する遺物は細片化したものが多く、有機物などの廃棄土壌と考えられるが、粘質が強い黒色砂泥が底部に堆積しており便所遺構の可能性もある。なお、柵 2 の南に沿って東西に小土壌群が並んでおり、これらも遺物の包含が少ないことから有機物の廃棄土壌と考えられる。



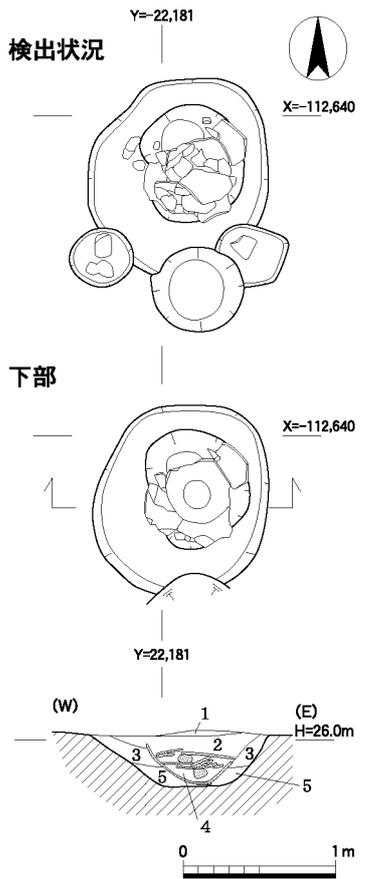
図 7 土壌 2 土器検出状況 ( 北東から )

土壌 5 ( 図版 7 ) 第 3 区で検出した直径約 1.1m の円形土壌である。深さ約 0.7m で、上層からは鏡鋳型が多量に出土した。

### ( 3 ) 室町時代の遺構 ( 図版 2 ・ 15 ~ 17 )

上層遺構面で検出した遺構は建物・柵・井戸・土壌・溝・肥溜・埋嚢・路面遺構などである。時期的には 14 世紀前半から 15 世紀前半のものである。ただ、当地が衰退した 16 世紀中頃の肥溜を 2 基を検出している。これらの遺構は少なくとも 16 世紀中頃には、当町中央域が畠地として利用されていたことを示しており、土地利用のあり方を示唆している。

建物 2 ( 図版 3 ・ 15 ) 第 1 区北東部で検出した、東西 8m 以上、南北 5.5m 以上の建物で、東と北は調査区外に延長する。南側柱は根石を伴う直径 0.4m ほどの円形柱穴の並びで確認でき、西側柱も浅い円形柱穴が並ぶ。おそらく西側柱にも根石が伴っていたと想定できる。柱間は不揃いで、建物の振れはほぼ真北である。建物内では約 0.1m の厚さで黄褐色 ~ 暗オリーブ褐色砂泥を堅く叩き締めて整地しており、土間として機能したと考えられるが、この整地土上で焼土と炭が堆積した深さ 0.05m の浅い焼土壌を検出している。東西約 0.9m、南北約 0.6m の範囲に及んでおり、竈床の可能性もある。また、建物の南西隅には、西側柱列に接して常滑の埋嚢が設置されており、埋嚢の南側に接して 1 間分の柱の張り出しが確認できた ( 図 8 )。北側に対応する柱穴は確認できないが、この埋嚢の部分が建物内として西に張り出す構造であった可能性もある。さらに、建物の南西、南側柱列から約 1.2m の位置で、置石を検出した。東西約 0.45m、南北約 0.3m、厚さ約



- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘土、炭をやや含む
- 2 2.5Y4/1 黄褐色泥砂、炭・焼土をやや含む
- 3 10YR3/2 黒褐色泥砂
- 4 7.5Y2/1 黒色砂泥、礫を多く含む
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥、礫を多く含む

図8 埋甕実測図(1:50)

がなく根巻き石で柱を固めている。油小路東築地心の推定ラインからの距離は、東端柱で東へ約10.7mとなっており、建物4と同様に油小路に面した建物の南東部と考えられる。なお、建物5は柱穴が後述する炉群を切っているため、後出する建物と考えられる。

柵5(図版3) X=-112,643ラインに設けられた東西柵である。後述する溝1が埋められた後に設けられている。東は調査区外に延長し、西端はY=-22,180.5ラインで途切れている。柱間は1m前後とやや不揃いで、柱穴は直径0.3~0.4mの円形を呈する。X=-112,643に位置し、振れはほとんどない。

柵6(図版3) 建物2の南側柱に接するように検出した東西柵で、柱間6間分(約9.5m)を確認した。西はY=-22,183ラインで途切れ、東は調査区外に延長する。柱間約1.5m、柱穴の直径約0.4mであるが、西端1間分だけ柱間約2mと広く、柱穴も直径0.5~0.6mと大きくなっている。この部分は西一行と西二行の境界にほぼ合致しており、後述する辻子からの入り口として機能したためと考えられる。なお、この柱穴は建物2柱穴と埋甕を切って成立している。X=-112,641に位置し、西に対して南へ約1°振っている。

柵7 建物3の南約2.5mの位置にある東西柵である。柱穴は直径約0.3mの円形で根石を伴う

0.15mの扁平な石で、平坦面を上にして据えられていた。遺構面の標高は約26.0mで、平坦面の標高は26.1mであることから、約10cmほど地表に出ていたことになる。建物2に伴って何らかの機能を有した踏石と考えられる。

建物3 第1区西から第3区東にかけて確認した柱穴群を建物として認識した。大半が攪乱で壊されており全容は明らかでないが、東西約7m、南北3m以上の小型建物で北側は調査区外に延長すると考えている。柱穴は直径0.3~0.4mの円形で根石を伴う。北に対して西に約2°振っている。

建物4(図版4) 第3区西端部で重複して検出した建物群のうち、北に対して東へ約1°振っている建物である。東西2間(約4.8m)以上、南北1間(約1.5m)以上の建物で、西と北は調査区外に延長する。柱穴は直径0.3~0.5mの円形で、根石を伴っている。油小路東築地心の推定ラインからの距離は、東側柱で東へ約11.3mとなっており、油小路に面した建物の南東部と考えられる。

建物5(図版4) 建物4と重複する建物である。東西2間(約3.7m)以上、南北2間(約2.8m)以上の建物で、振れはほぼ真北である。柱穴は0.3~0.6mの円形で、南側柱には根石が伴っているが、その他の柱穴には根石

ものが多い。柱間は1.5～1.8mと不揃いで、西は調査区外に延長するが、東端はY=-22,183ライン付近で途切れる。X=-112,641～112,641.7に位置し、西に対して北へ約4°と大きく振っている。

柵8 第2区で検出した東西に並ぶ柱穴2基を柵として認識した。東西は調査区外に延長すると思われる。柱穴は直径約0.3mで、深さも約0.3mとしっかりしており、柱間は約1.4mである。X=-112,646.2に位置しており、北三門と北四門の境界にほぼ合致する。

溝1 柵5の下層で検出した東西溝である。幅約2m、深さ約0.3mで、西端はY=-22,181ラインで途切れている。

溝2 柵7の南に接して検出した東西溝である。幅約2m、深さは0.3～0.4mで、東端はY=-22,183.2ラインで途切れている。堆積状況から2時期に分かれており、新段階の溝は幅約1.2mと狭くなり、出土遺物から少なくとも16世紀まで機能していたことがわかる。なお、溝1と溝2の間は幅2mほどの土橋状に掘り残されており、西一行と西二行の境界にあたることから、通路として利用されていたと考えられる。

路面遺構 溝2南肩と柵8の間の南北幅約3mの空閑地では、礫を多く含む堅く締まった面が数層にわたって検出できており、東西方向の路面として認識している。柵8が北三門と北四門の境界に位置することから、四行八門に規制されて油小路から東西に通された辻子遺構と考えられる。

井戸5（図版6・18） 第3区中央の南壁よりに穿たれた方形横棧縦板組みの井戸で、後述する井戸6に切られている。掘形は2.5m前後と推定でき、木枠は一辺約0.8mである。構造材の遺存状況は悪いが、各辺に3枚の縦板を並べて横棧で土圧を押さえる構造となっている。底部標高は24.56mである。

井戸6（図版6・18） 井戸5の西に接して検出した円形縦板組み井戸で、南半分は調査区外となっている。掘形は約2.6mで、幅約0.3mの縦板を円形に立て並べて井戸枠を構築しており、井戸枠の直径は約0.95mである。底部の標高は24.4mである。なお、井戸5と井戸6は油小路東築地の推定ラインから東へ約12.5～14.5mの位置にあり、建物4の東に接して穿たれている。これらのことから井戸5あるいは井戸6が建物4と同時期に機能していた可能性が高い。なお、井戸6は埋没後には焼土と炭を多量に含む黒褐色砂泥で上層を丁寧に整地している。

井戸7（図版6） 井戸6の北側約3.5mに位置する円形縦板組み井戸である。北側の大半が調査区外となるため規模は不明だが、幅約0.25mの縦板を円形に組んで井戸枠を構築している。井戸枠の直径は不明である。建物5柱穴と同じく西側の炉群を切って穿たれており、建物5と共存する可能性が高い。底部の標高は24.42mである。油小路東築地の推定ラインからは、東へ約11.5mの位置にある。

土壌6（図版7・16） 溝1の南に接して検出した直径約2.15mの円形土壌である。深さ約0.7mの播鉢状を呈し、礫が多量に詰まった黒色粘質土で埋められていた。この土壌6の南側では明確な遺構は全く検出できず、中世耕作土と暗渠溝が確認できるだけである。おそらくこの場所は

畠地として利用されたと考えられ、土壌6も堆積状況から井戸ではなく、耕作に伴う遺構である可能性が高い。

土壌7・8（図版7・16）第1区北東部で検出した2基の方形土壌である。土壌7は東端が調査区外となるため東西幅は不明だが、南北約1.8m、深さ約0.5mで、おそらく正方形に近い平面プランになると考えられる。土壌8は東西約1.4m、南北約1.8mの南北に長い長方形を呈し、深さ約0.35mである。ともに内部に多量の礫が落ち込んでおり、礫の上層に細かい灰黄褐色粘土が薄く堆積していた。土壌内からは鉄釘や細かい骨片が出土しており、木棺墓と考えられる。おそらく、封土を構成した礫群や灰黄褐色粘土が、棺の腐敗とともに中に落ち込んだものと考えられる。建物2の整地土が土壌上に及ばないため、建物2が廃絶した後に形成された遺構である。

土壌9 建物2の西で検出した不整形土壌である。東西約1.7mほどで、深さは約0.3mである。京都系の土師器皿・瓦器小皿と瀬戸内系の土師器椀が重なるように共伴して出土しており、良好な一括資料となっている。

土壌10 第1区の西端で検出した不整形土壌である。北側は攪乱で壊され西側は調査区外となるため規模は不明だが、1.2m以上の広がりを持ち、深さは約0.2mである。鏡鑄型や埴埴・羽口など鑄造関係遺物が多く出土した。

土壌11（図版7）井戸6の東約5.5mの位置に穿たれた廃棄土壌である。南北約2.2m、東西約1.6mの南北方向の長方形を呈し、深さは約0.7mである。土器類とともに鑄造関係の遺物を多く包含していた。とくに鑄鉄関係の遺物が出土しており、この地域で鑄鉄が鑄銅と並行して行われていたことを示唆している。

土壌12 井戸7の東で検出した不整形土壌である。北側の大半が調査区外となるため規模は不明だが、確認できた東西幅は約3.3m、深さ約0.5mである。

土壌13 第3区西端で検出したピット状の土壌である。直径約0.5mの円形を呈し、深さは0.2mである。完形の土器を多量に包含しており、地鎮に関係する遺構と考えられる。

炉跡群（図版4・5・18）第3区西端部で鑄造関係の炉跡群を多数検出しており、これらは炉群Aと炉群Bに分かれる。炉群Aは1辺約1.8mの方形の範囲で約0.4mほど掘り下げ、地盤改良してから上面に炉を構築したものである。炉跡は掘り込み構造をもつ小型炉を2箇所検出した。炉1は直径約0.5mの円形を呈し、深さ約0.15m、炉2は直径約0.3～0.4mの楕円形を呈し、深さ約0.2mである。ともに壁面が高温被熱のため硬化しており、炉床には炭を多量に含む黒褐色土層がカーボンベットとして堆積していた。また、炉1・2の周りは堅く締まった焼土面が広く分布しており、この場所での頻繁な鑄造作業を示唆している。炉3は炉1・2の東に接して検出した炉である。直径約0.4mの浅い円形の窪みに細かい鑄型片を敷き詰め、炉床にカーボンベットとして炭が堆積していた。さらに、炉群の東には土器を多く包含する炭層が、炉群から掻き出したように厚く堆積していた。なお、炉群Aは建物5の柱穴によって壊されており、建物4に伴うと想定している。

炉群Bは炉群Aの南西で散在して検出した炉跡群である。炉群Aのように地盤改良のような基

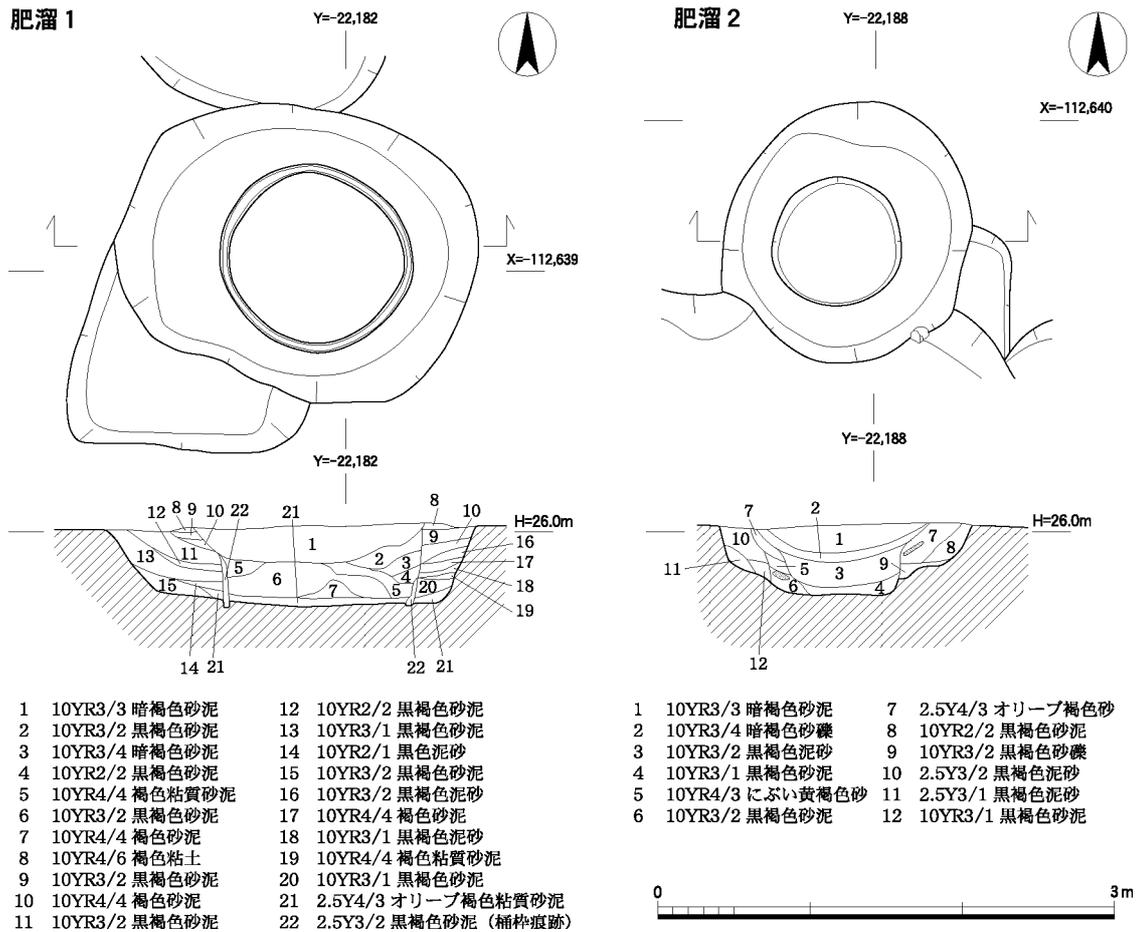


図9 肥溜1・2実測図(1:50)

礎事業を行わず、それぞれ単独に形成されている。検出状況から炉群Aよりも古いと考えられる。炉4・5は炉群Aの南で検出した、直径約0.5mの2時期に切り合った炉跡である。炉床がやはり被熱のため硬化していた。炉6は炉4・5の西約1mで検出した炉床である。西と南が壊されているため規模は不明だが、炉4・5と同じ構造をもつと考えられる。さらに南壁際で被熱粘土ブロックを検出しており、遺存状況は良くないが炉7として認識している。これら炉群Bに伴う建物は現状では確認できない。

肥溜1(図9) 第1区中央で検出した大型の肥溜である。掘形は東西約2.4m、南北約2mの楕円形を呈し、中央に直径1.2mの桶を据えた痕跡が認められる。深さ約0.5mで、桶の裏込めは版築状に築き固めており、底部もオリーブ褐色粘質砂泥を敷き詰めて固めていた。

肥溜2(図9) 第1区西端部で検出した肥溜である。掘形は直径1.6~1.7mの円形を呈し、桶痕跡は直径約0.85m、深さ約0.45mである。

## 4. 遺物

遺物は整理箱にして85箱分出土した。そのほとんどが土器類であり、瓦埴類は非常に少ない。また、瓦埴類でも埴の出土が目立ち、軒瓦にいたっては巴文軒丸瓦片が3点、連巴文軒平瓦が1点、唐草文軒平瓦が1点出土しているだけである。土器類は破片数では供膳具としての土師器が圧倒的に多い傾向にあるが、貯蔵具や煮沸具として焼締陶器や瓦器の出土も多く見られる。輸入陶磁器も一定量出土しているが、土師器などとともに一括廃棄されたものはなく、小破片となって調査区全体から出土する傾向にある。鑄造関係遺物としては、井戸や土壇などから鑄型・埴塙・フイゴ羽口・炉壁などが多量に出土している。また、短刀や鑿などの鉄製品とともに砥石が多く出土しており、工房としての遺跡の性格をよく示している。ここでは「平安時代中期以前の遺物」と「平安時代後期から鎌倉時代・室町時代の遺物」に項をわけ、さらに後者を土器類・石製品・金属製品・鑄造関係遺物・瓦埴類に分類して報告する。

### (1) 平安時代中期以前の遺物 (図版8)

平安時代中期以前の遺物は、柵1柱穴・土壇1とともに旧流路の整地層から出土しているが、出土量は非常に少ない。柵1柱穴から出土した遺物は比較的多く、土師器皿と杯(2・3)、須恵器皿(8)、黒色土器杯A(4)、緑釉陶器皿と椀(11・12)が出土している。土師器の皿(2)と杯(3)は体部オサエ調整で口縁部は屈曲し端部を内側に肥高させており、2の口縁には灯心痕跡が残る。黒色土器椀(4)はA類の杯で、体部外面はヘラ削り調整、内面は丁寧な横ミガキを施し黒色化させている。緑釉陶器皿(11)と椀(12)は底部を平高台にケズリ出し、底部外面

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代中期以前	土師器・須恵器・黒色土器・白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・土馬・承和昌寶	2箱	土師器3点、黒色土器1点、白色土器2点、緑釉陶器3点、灰釉陶器2点、須恵器3点、土馬1点、承和昌寶2点	少量	1箱
平安時代後期～鎌倉時代	土師器・白色系土器・瓦器・山茶椀・焼締陶器・輸入陶磁器・石鍋・石硯・砥石・渡来銭・青銅製品・鉄製品・鑄造遺物・瓦埴	33箱	土師器33点、白色系土器5点、瓦器7点、山茶椀1点、輸入陶磁器77点、石鍋1点、石硯1点、砥石2点、渡来銭1点、青銅飾板1点、鉄製品2点、鑄造遺物24点、瓦埴9点	2箱	27箱
室町時代	土師器・白色系土器・瓦器・山茶椀・須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器・石鍋・石硯・砥石・渡来銭・鉄製品・鉄塊・鉄滓・鑄造遺物・瓦埴	68箱	土師器91点、白色系土器31点、瓦器35点、山茶椀1点、須恵器3点、輸入陶磁器14点、石鍋9点、石硯1点、砥石9点、渡来銭7点、鉄製品10点、鉄塊2点、鉄滓10点、鑄造遺物30点、瓦埴5点	5箱	57箱
合計		103箱	439点(11箱)	7箱	85箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より18箱多くなっている。

まで釉がかかる京都近郊窯産のものであるが、11は硬陶で釉は薄く内面に灰が被るのに対し、12は軟陶で淡黄緑色に発色する。なお、11の内面には擦痕が残る。

土壌1から出土した遺物は細片化したものが多く、図化できる資料が少ない。土師器皿(1)は体部オサエ調整のものであるが、(2)よりも口径が小さくやや厚みを帯びる。須恵器壺(10)は土壌の上層から出土したほぼ完形の資料である。回転糸切り痕跡を残す平坦な底部からやや肩部の張った丸い体部が立ち上がり、口縁端部を上下に肥高させて端面を作り出した頸部を接合し成形する。この他、土壌底部から「承和昌寶」(16・17)が2枚出土している。



図10 土壌1出土「承和昌寶」

旧流路整地層からは細片化した土師器とともに、白色土器椀と高杯(5・14)、須恵器杯B(9)、灰釉陶器皿と椀(6・7)、緑釉陶器耳皿(13)などが出土した。白色土器椀(5)は低く幅広なケズリ出し輪高台をもつ底部破片で、高杯(14)は心棒痕跡を残す脚部で外面はランダムに面取りする。須恵器杯B(9)は第3区整地層からの出土で、底部外面に墨書記号が認められる。灰釉陶器皿(6)は第2区整地層からの出土で、内面に厚く灰釉が付着するK14型式の資料である。灰釉陶器椀(7)は高い高台をもち、内面には重ね焼きの痕跡を残す。底部外面に「好」の墨書が認められる。緑釉陶器耳皿(13)は軟陶で淡緑色に発色させた資料で、底部には回転糸切り痕跡が残り緑釉は底部までは及ばない。やはり京都近郊窯産であろう。なお、第3区整地層から小型の土馬(15)が出土している。頭部および後脚部が欠損するが、体部を折り曲げて成形するいわゆる「都城型」土馬と考えられる。

旧流路整地層からは細片化した土師器とともに、白色土器椀と高杯(5・14)、須恵器杯B(9)、灰釉陶器皿と椀(6・7)、緑釉陶器耳皿(13)などが出土した。白色土器椀(5)は低く幅広なケズリ出し輪高台をもつ底部破片で、高杯(14)は心棒痕跡を残す脚部で外面はランダムに面取りする。須恵器杯B(9)は第3区整地層からの出土で、底部外面に墨書記号が認められる。灰釉陶器皿(6)は第2区整地層からの出土で、内面に厚く灰釉が付着するK14型式の資料である。灰釉陶器椀(7)は高い高台をもち、内面には重ね焼きの痕跡を残す。底部外面に「好」の墨書が認められる。緑釉陶器耳皿(13)は軟陶で淡緑色に発色させた資料で、底部には回転糸切り痕跡が残り緑釉は底部までは及ばない。やはり京都近郊窯産であろう。なお、第3区整地層から小型の土馬(15)が出土している。頭部および後脚部が欠損するが、体部を折り曲げて成形するいわゆる「都城型」土馬と考えられる。

## (2) 平安時代後期から鎌倉時代・室町時代の遺物

### 1) 土器類

井戸1～3出土土器(図版8) 下層遺構面で検出した井戸からは土師器を中心とした遺物が出土しているが、図化できる資料は少ない。井戸1から出土した土師器は、口径8.3～9.1cmの小皿(18・19)と口径13～14cmの土師器大皿(23・24)がある。また、回転成形による白色系の小皿(28)が出土しており、底部には回転糸切り痕跡が残る。井戸2からは井戸1出土資料と同型式の土師器小皿(20)・大皿(25)とともに、白色系のコースター形の皿(27)が出土している。井戸3からは土師器小皿(21・22)と大皿(26)が出土した。小皿(21)は口径8.6cmで口縁部にやや屈曲をもつ。小皿(22)は口径8.7cmで、口径部に灯心痕跡が認められる。土師器大皿(26)は口径12.1cm、器高約3.4cmと深い器形をもつ。この他、一般的な瓦器小皿(30)とともにコースター形の瓦器小皿(29)が出土している。これらの土器群は平安京編年の 期新段階から 期古段階に比定でき、13世紀後半の年代を与えることができる<sup>1)</sup>。

土壌2出土土器(図版8・19) 第1区の調査区南端の下層遺構面で検出した土壌2の資料は、一括遺物として重要である。土師器は口径9.5cm前後の小型皿(31～35)と口径15cm前後の大型

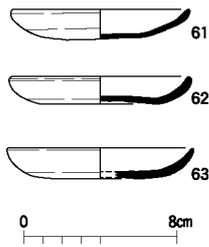


図11 土壌5出土土器  
実測図(1:4)

皿(36~39)がまとまって出土した。平安京編年の 期新段階から 期古段階に比定できるもので、12世紀後半から13世紀初頭の年代が与えられる。これらの土師器群と共伴して尾張型の山茶椀(41)が完形で出土した。口径15.8cm、器高5cmで、底部には潰れた低い高台を貼り付けるが、糸切り痕跡が明瞭に残る。また、楠葉型の瓦器椀(40)も破片ながら出土している。

土壌3出土土器(図版8・19) 土壌3は第2区の下層遺構面で検出した遺構で、ここから出土した土器群は鑄造関係遺物を共伴する資料である。土師器小皿(42~44)は口径7.6~8.8cmとやや小さく、土師器大皿(45~50)も口径11.6~12.4cmと対応して小型化し、口縁部がやや屈曲して立ち上がる。白色系土器では小型のコースター形皿(51)と回転成形皿(52)が出土し、丸みを帯びた椀状の皿(53)も出土している。平安京編年の 期古段階に比定でき、13世紀後半の年代が与えられる。

土壌4出土土器(図版8) 出土量は少ないが、口径9.2cmの土師器小皿(54)と口径12.6cmの大皿(55)が出土している。白色系土器は丸みを帯びた椀状の皿(56)が見られる。瓦器は供膳具として口径9cm前後の小皿(57~59)とともに、煮沸具の瓦器羽釜(60)や鍋も出土している。瓦器小皿はミガキ調整が省略されており、(59)では燻しがかからず灰白色に焼き上がっている。平安京編年の 期新段階に比定でき、13世紀中頃から後半の年代が与えられる。

土壌5出土土器(図11) 第3区で検出した土壌5からは多量の鏡鑄型が出土しており、それらと共伴する資料である。土器の出土量は非常に少ないが、土師器小皿(61~63)は口径が9.4~9.8cmとやや大きく、古い様相をみせている。13世紀前半まで遡りそうであるが、資料が少なく確かではない。

建物2 整地土・埋甕出土土器(図版9) 第1区の上層遺構面で検出した建物2の土間を構築する整地層や柱穴から、土師器小皿(64)と大皿(65)、および瓦器小皿(66)と瓦器椀(67)が出土している。平安京編年の 期新段階から 期古段階のもので、建物2は13世紀後半以降に建てられたことを示している。また、建物内の焼土壌から土師器小皿(68)が据わった状態で出土した。底部から口縁部が屈曲して直線的に立ち上がる形態は瓦器小皿と同じであり、胎土も緻密で他の土師器とは異なる。焼成も灰白色に焼き上がっており、口径も9.3cmと土壌4から出土した資料(59)と類似する。瓦器皿との互換性が非常に高い土師器皿である。この他、建物2と共存すると考えている埋甕埋土から、土師器大皿(69)、瓦器小皿(70)、瓦器椀(71)が出土している。土師器大皿は推定口径が11.2cmで、 期中段階から新段階(14世紀前半から中頃)に想定できる。資料が少なく断定はできないが、これらの土器が建物2の下限を示すものであろう。なお、据えられた大甕は常滑産の焼締陶器大甕である。

溝1出土土器(図版9) 土師器は細片が多く大皿(72)が図示できるにとどまる。口径10.5cmと小型化しており、口縁部は外方へ屈曲しながら立ち上がる。白色系土器は口径11.1cmのやや小さい皿(73)と口径12.9cmの皿(74)がある。資料数が少ないため断定できないが、これらの

土器は平安京編年の 期新段階から 期に属するもので、14世紀後半と捉えるのが妥当であろう。この他、灰釉陶器系の椀（75）と底部内面に花文を暗文で表現した瓦器杯（76）が出土している。

建物4 整地土出土土器（図版9・20） 建物4 が建てられる地盤を整地した土層内から多くの土師器が出土している。土師器小皿（77～79）は口径8cm前後のもので、口縁部はやや外反ぎみに立ち上がる。資料（79）の口縁部には灯心の痕跡が残る。大皿（80～83）は口径11cm前後のもので、やはり外反ぎみに立ち上がった口縁の端部をやや内側に肥厚させる。白色系土器は口径8cmほどのへそ皿（84～86）と口径11.5cm前後の皿（87～91）が出土している。平安京編年の 期新段階に比定でき、14世紀中頃の年代が与えられる。この他、瓦質土器で小型の三足羽釜（92）が出土している。底部の被熱による煤が脚部破面にまで及んでいるため、脚部が破損した後も使用していたことがわかる資料である。

炉群A 地業・炉東炭層出土土器（図版9・20） 第3区の炉群Aを形成する掘り込み地業内と、炉の東に堆積した炭層から土器が多く出土している。土師器小皿（93～95・99～101）は口径8cm前後のもので、口縁部が内湾して立ち上がるタイプ（94）も少数みられるが、ほとんどが外反ぎみに立ち上がる。口縁部に灯心痕跡が残るもの（94・99・100）がある。土師器大皿はやはり口縁部が外反して立ち上がっており、口径10.4cmほどのやや小型のもの（96・97）と口径11.5cm前後のもの（98・102～104）がある。前者には口縁部に灯心痕跡が残るもの（97）がみられる。白色系土器は口径10.6～12.0cmの皿（105～107）が出土している。また、地業から出土した瓦器椀（108）は内面の螺旋ミガキが粗く、外面のミガキは施されない。煮沸具としての瓦質土器は羽釜（110～112）と鍋（114）が出土し、中世須恵器として鉢（109・113）が出土した。とくに陶器鉢（109）は底部には回転糸切り痕跡が残るが、体部から口縁にかけて内湾ぎみに立ち上がり、端部を丸くおさめる。砂粒を多く含み、にぶい黄橙色に焼き上がっているのが特徴的である。これらの土器群は建物4 整地土から出土した土器群と型式差が認められず、平安京編年の 期新段階（14世紀中頃）の年代が与えられる。

井戸5～7 出土土器（図版10・21） 第3区の上層遺構面に穿たれた井戸群の資料であるが、それぞれの井戸から出土する土器に型式差はほとんど見いだせない。井戸5 出土資料は（115～123・126・127・130・136・136～138）、井戸6 出土資料は（124・125・128・129・139・140）、井戸7 出土資料は（131～135・141～144）である。土師器小皿は口縁部が外反して立ち上がる口径8cm前後のもので、器高が浅く底部外面が上方にやや窪むもの（115・131）と、器高が深く底部が平坦なもの（116・132）に分かれる。土師器大皿も口縁部が外反して立ち上がる口径11.5cm前後のもの（118～120・134）が一般的であるが、口径10.8cmのやや小型のもの（117）や、小皿に対応するように口径10.1cmで器高が浅く底部外面が上方に窪む資料（133）がある。白色系土器はへそ皿（121）とともに口径11.3cm前後の皿（122～125）が出土している。瓦器は供膳具として小皿（126・127）、杯（128）、椀（129）が出土しており、煮沸具としての瓦質土器は小型羽釜（130）、鍋（137）、羽釜（138・139）がある。また、井戸5 から出土した片口の須恵器鉢（136）は、胎土が粗く砂を多く含んでいるのが特徴的である。この他、井戸6 からは滑

石製鍋（140）が出土しており、井戸7からは特殊な土器として油煙をとる道具と考えられている丸底小鉢（135）や瓦質火鉢（142～144）が出土している。なお、図示はできなかったが井戸5から内面に漆が付着した灰釉陶器系の椀が出土している。これらの土器群の年代であるが、平安京編年の 期新段階から 期古段階に比定でき、14世紀中頃から後半の年代が与えられる。

土壌7・8出土土器（図版11） 墓と考えられる土壌7・8から出土した土器は、細片化したものばかりで出土量も多くない。土壌7からは口径10cmの土師器大皿（166）が出土している。土壌8からは口径8.9cmの土師器小皿（167）と、白色系土器の小皿（168）と大皿（169）が出土している。土壌7から出土した土師器大皿は小型化が進んでいることから、平安京編年の 期まで下がり14世紀末から15世紀初頭の時期が与えられる。建物2が廃絶後に形成された土壌群であることに矛盾はないであろう。

土壌9出土土器（図版11・22） 第1区で検出した良好な一括遺物の資料である。供膳具の土器ばかりが浅い土壌内に重なって廃棄されており、煮沸具はほとんど含まない。土師器小皿（145～149）は口径8cmのもので、口縁部の外反はあまり強くない。胎土が粗く灰白色に焼き上がるもの（148・149）と、胎土が緻密で浅黄橙色に焼き上がるもの（145～147）に分かれており、生産地の違いを表している可能性が高い。土師器大皿（150～155）は口径11.4～12.1cmで、外反ぎみに立ち上がる口縁の端部はやや内側に肥厚させる。土師器小皿とは異なり、胎土が緻密で浅黄色橙から鈍い橙色に焼き上がるもので統一されている。白色系土器は極めて少ないが、底部外面がやや上方に窪んだ小皿（159）が出土している。瓦器は口径8.0～8.4cmの小皿（160～165）だけが出土し、他の器種は出土しない。これらの土器群とともに、瀬戸内地方に特徴的な土師質土器椀（156～158）が多く出土した。体部の成形は瓦器椀の成形と類似しており、口縁外面から内面にかけて丁寧なナデ調整によって仕上げる。体部外面はオサエ未調整で、底部に断面三角形の高台を貼り付ける。酸化焰焼成のため、灰白色から淡黄色に焼き上がるのが特徴的である。これら土壌9の土器群は、京都近郊産の土師器皿と瓦器小皿、そして搬入された瀬戸内系土師質土器椀がセットで使用されていたことを示しており、器種構成を考えるうえで貴重な資料であろう。なお、京都近郊産土師器の型式から年代を決めると、平安京 期中段階から新段階に相当し、14世紀前半から中頃ということになる。

土壌10出土土器（図版11） 鏡鑄型などの鑄造遺物と共伴して出土した土器群である。土師器小皿（173・174）は口径8.5cm前後のもので、底部外面が上方に窪む。資料（173）の口縁部には灯心痕跡が認められる。土師器大皿は口径10.6cmのもの（175）と口径12.9cmのもの（176）に分かれる。白色系土器はへそ皿（178・179）とともに、口径11cm前後の大皿（180・181）と口径13.4cmの大皿（177）が出土している。これらの土器群は、平安京編年の 期中段階に比定でき、14世紀末から15世紀初頭の年代が与えられる。

土壌11出土土器（図版11） 土壌11からは鉄滓などの鑄鉄関係の遺物が出土しているが、土器類の出土は少ない。土師器では口径12.7cmの大皿（170）が出土しており、白色系土器ではへそ皿（171）とともに口径11.7cmの大皿（172）がみられる。出土点数が少ないので断定できないが、

期中段階から新段階（14世紀中頃から後半）に想定できる。

土壌12出土土器（図版11） 第3区北壁ぎわで検出した土壌12から多くの土器が出土した。土師器は口径6.9～8.2cmほどの口縁がやや外反ぎみの小皿（182～184）と、口径9.3～10.2cmの口縁が内湾ぎみに立ち上がる小皿（185～187）に分かれる。土師器大皿も小皿に対応するように、口径11.5～12.0cmの口縁部が外反するもの（188）と、口径15cmの口縁部が内湾するもの（189）に分かれており、これらの違いは同一時期における

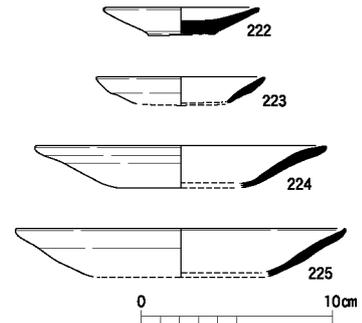


図12 溝2出土土器実測図（1：4）

型式差ではなく時期差として認識すべきものである。実際に他の土器をみると、瓦器では小皿（192・193）、椀（194・195）、小椀（196）は時期的に古い様相を呈するが、白色系土器のへそ皿（190）と大皿（191）は新しい様相をもつ。同一土壌の資料として取り上げたが、遺構として12世紀段階のものと14世紀段階のものが重複していた可能性が高い。

土壌13出土土器（図版11） 第3区の西端部で検出した小土壌から多量の土器が出土した。ほとんどが土師器で、小皿は資料（197）が口径6.9cmとやや小さいが、他の資料（198～201）は口径8.0～8.3cmに収まる。口縁部立ち上がりの外反は強くないが、資料（201）は屈曲部のナデ調整によって外反が強くなっている。土師器大皿（202～206）は口径11～12cmほどのもので、白色系土器大皿（207）は破片のため明確でないが口径約11cmである。この他、瓦質土器の鍋（208）が出土している。平安京編年の 期中段階から新段階に比定でき、14世紀前半から中頃の資料である。

肥溜1・2・溝2出土土器（図12、図版11） 第1区で検出した2基の肥溜出土遺物は、当地の土地利用が耕作地へと変貌した時期を知るための資料となる。出土土器群は同一型式に属するもので、土師器皿には底部外面が上方に窪んだ小皿類と、平坦な底部から口縁部が浅く直線的に立ち上がる皿がある。前者は口径6cm前後のもの（212・213）と口径7cmほどのもの（214・215）に分かれる。後者には口径9cm前後のもの（209・216・217）、口径12cm前後のもの（210・219・220）、口径14cmほどのもの（221）、口径17cm近くのもの（211）がある。これらの土器群は平安京編年の 期中段階から新段階に比定でき、16世紀後半の資料である。なお、溝2の新しい時期には、回転成形小皿（222）とともに肥溜出土資料と同型式のもの（223～225）が含まれており、16世紀後半まで地割溝として機能していたことがわかる。なお、資料（209・217・223）の口縁部には灯心痕跡が残る。

輸入陶磁器（図版23～25） 輸入陶磁器は各調査区で多く出土したが、遺構に伴って出土する状況ではなく、ほとんどが小破片となって混入した状態で出土しており、形式的にも遺構群よりも古い様相をもつものが多く出土する。個々の遺物の出土地点は表3で示すこととし、ここでは調査地全体を通じてどのような輸入陶磁器が出土しているかを簡単に述べることにする。

白磁椀は肉厚な玉縁口縁をもつもの（226～228）と、直線的で口縁端部を外反ぎみに開くもの（229～233）がある。後者はさらに口縁端部が滑らかに外反するもの（230～232）と屈曲して外

反するもの(229・233)に分かれる。資料(231)の内面には篋文が認められる。高台部の破片は釉が内面全体に掛かるもの(234)もあるが、内面見込みの釉を環状に掻き取ったもの(235・236)が目立つ。白磁皿は口縁部が屈曲して外反ぎみに立ち上がるもの(237・238)と、内湾ぎみに立ち上がるもの(239・240)がある。資料(238)には輪花の装飾がなされており、資料(240)内面には内面に篋文が認められる。底部破片は平底で釉が底部に掛からないもの(241～244)で、資料(243)には内面に花文状のヘラ描きを施す。白磁壺は口縁部を折り曲げて玉縁状口縁を作るもの(245～247)と、口縁端部を下方に肥厚させて断面撥状の平坦面を作りだすもの(248)がある。肩部に耳をもつ資料(252～254)が多く、四耳壺として復元できる。また、水注の把手が剥離した肩部(250)と注口部(255)もある。この他、資料(251)は頸部、資料(249・256)は体部破片である。底部(257)は削りだし高台で、内面底部まで施釉されている。

青磁椀は龍泉窯系のものが多く、口縁部資料では外面に鎬連弁文をもつもの(258～260)と、内面に篋描き施文をもつもの(261・263)、無文のもの(262)がある。底部資料には内面見込みに篋描き花文を有するもの(265・267)と、体部外面は縦方向の篋彫線で内面見込みに「月」の陽刻文が認められるもの(266)があり、小椀(264)も出土している。また、同安窯系青磁椀として、体部内外面に櫛描き施文があるもの(268・269)が出土している。青磁皿は無文で屈曲した口縁部が強く外反するもの(270)と、底部見込みに櫛描き文(271)、篋と櫛による花文(272)、篋描き花文(273)をそれぞれ施文するものがある。資料(273)が龍泉窯系、資料(270～272)は同安窯と考えられる。

なお、これらの白磁や青磁は遺構群の年代よりも古い様相をみせているが、13世紀後半から14世紀前半に増加傾向が認められる口縁端部口禿げの資料も若干出土している。資料(274～277)は口禿げ白磁皿の口縁部で、平坦な底部(280～282)をもつ。これらの皿とセットになるのが口禿げ椀(279)である。また、同時期の龍泉窯系青磁は、口縁部が外方に屈曲する杯(283～285)、鉢(286)、椀(287)がある。資料(284)内面には篋描き施文、資料(285)内面には細弁状施文が認められる。椀(287)は高台径が小さく、外面に細弁状の鎬連弁を施す。

青白磁は梅瓶・輪花杯・水注・装飾壺・合子が出土している。資料(288～292)は梅瓶体部の破片で、資料(292)は火を受けている。資料(293)は、外方へ屈曲した口縁部が輪花状になった杯の小破片である。資料(295)は水注肩部と考えられ、篋描き施文で装飾し把手が取り付けが、把手本体は剥離している。資料(296)は装飾壺で、内面には肩部と体部を接合した時の痕跡が段として残る。外面は肩部を陽刻の花文で装飾し、体部は細弁状に縦方向に刻みをいれており、釉は体部上半までしか掛からない。水注になる可能性がある。資料(294・297～302)は合子で、蓋は天井部が細弁状に装飾されたもの(294)と、陽刻の花文で装飾したもの(297・298)がある。資料(297)の装飾は資料(296)と全く同じであり、同一生産地のものであろう。受口身は体部外面を細弁状の縦刻み文で装飾したもの(299～301)と、体部が無文のもの(302)がある。底部外面は平坦で釉が掛からない。

輸入陶器は盤、壺類が出土している。盤は平底で口縁部が外方に屈曲する型式のもので、内面

に黄釉を掛けて、鉄絵を有するものである。口縁部（303・304）、体部から底部（306・308～310）、底部（305・307）の破片が出土した。壺は端部を丸く仕上げた口縁部（311・312）と、口縁端部を篋押しして波状に仕上げたもの（313）がある。また、緑釉陶器として盤（314）と壺体部（315・316）の破片が出土しており、いずれも華南地方のものと考えられる。

表3 輸入陶磁器出土地点表

No.	種類	地区	出土遺構	No.	種類	地区	出土遺構
226	白磁碗口縁部	第3区	上層遺構面掘り下げ	272	青磁皿口縁部	第1区	上層遺構面検出中
227	白磁碗口縁部	第3区	上層遺構面掘り下げ	273	青磁皿底部	第1区	上層遺構面検出中
228	白磁碗口縁部	第3区	建物4柱穴	274	白磁皿口縁部	第3区	炉群A地業
229	白磁碗口縁部	第2区	上層遺構面掘り下げ	275	白磁皿口縁部	第1区	溝1
230	白磁碗口縁部	第3区	下層遺構面土壌	276	白磁皿口縁部	第1区	上層遺構面検出中
231	白磁碗口縁部	第2区	上層遺構面掘り下げ	277	白磁皿口縁部	第3区	上層遺構面検出中
232	白磁碗口縁部	第1区	上層遺構面検出中	278	白磁皿口縁部	第3区	上層遺構面掘り下げ
233	白磁碗口縁部	第2区	上層遺構面掘り下げ	279	白磁碗口縁部	第3区	井戸6
234	白磁碗底部	第3区	炉群A周辺	280	白磁皿底部	第3区	上層遺構面掘り下げ
235	白磁碗底部	第3区	井戸5木枠内	281	白磁皿底部	第2区	井戸2上層
236	白磁碗底部	第3区	建物4整地土	282	白磁皿底部	第1区	下層遺構面検出中
237	白磁皿口縁部	第3区	井戸5	283	青磁杯口縁部	第2区	近世東西溝
238	白磁輪花皿口縁	第1区	上層遺構面掘り下げ	284	青磁杯口縁部	第1区	下層遺構面検出中
239	白磁皿口縁部	第1区	上層遺構面掘り下げ	285	青磁杯口縁部	第2区	上層遺構面掘り下げ
240	白磁皿口縁部	第3区	上層遺構面掘り下げ	286	青磁鉢口縁部	第3区	井戸6
241	白磁皿底部	第3区	上層遺構面掘り下げ	287	青磁碗底部	第1区	上層遺構面掘り下げ
242	白磁皿底部	第1区	柵7柱穴	288	青白磁梅瓶体部	第3区	建物4整地土
243	白磁皿底部	第1区	近世土壌	289	青白磁梅瓶体部	第3区	土壌12
244	白磁皿底部	第3区	土壌5	290	青白磁梅瓶体部	第1区	攪乱
245	白磁壺口縁部	第1区	肥溜2	291	青白磁梅瓶体部	第1区	上層遺構面検出中
246	白磁壺口縁部	第1区	上層遺構面検出中	292	青白磁梅瓶体部	第3区	土壌12
247	白磁壺口縁部	第2区	上層遺構面掘り下げ	293	青白磁輪花杯口縁部	第1区	下層遺構面検出中
248	白磁壺口縁部	第2区	下層遺構面検出中	294	青白磁合子蓋天井部	第1区	下層遺構面検出中
249	白磁壺体部	第2区	上層遺構面掘り下げ	295	青白磁水注肩部	第1区	上層遺構面土壌
250	白磁壺肩部	第1区	土壌3	296	青白磁壺肩部	第1区	上層遺構面土壌
251	白磁壺頸部	第3区	建物4整地土	297	青白磁合子蓋	第3区	建物4整地土
252	白磁壺肩部	第3区	上層遺構面検出中	298	青白磁合子蓋口縁部	第3区	炉群A地業
253	白磁壺肩部	第3区	上層遺構面土壌	299	青白磁合子身口縁部	第1区	溝1
254	白磁壺肩部	第1区	上層遺構面ビット	300	青白磁合子身口縁部	第3区	上層遺構面検出中
255	白磁水注口部	第3区	建物4整地土	301	青白磁合子身口縁部	第3区	下層遺構面土壌
256	白磁壺体部	第3区	建物4整地土	302	青白磁合子身	第1区	土壌6
257	白磁壺底部	第2区	近世東西溝	303	陶器盤口縁部	第3区	下層遺構面土壌
258	青磁碗口縁部	第3区	井戸3	304	陶器盤口縁部	第2区	下層遺構面土壌
259	青磁碗口縁部	第1区	上層遺構面検出中	305	陶器盤底部	第1区	上層遺構面掘り下げ
260	青磁碗口縁部	第3区	井戸3	306	陶器盤底部	第1区	建物2焼土壌
261	青磁碗口縁部	第1区	上層遺構面検出中	307	陶器盤底部	第1区	近世土壌
262	青磁碗口縁部	第3区	上層遺構面掘り下げ	308	陶器盤底部	第3区	上層遺構面掘り下げ
263	青磁碗口縁部	第1区	上層遺構面検出中	309	陶器盤底部	第1区	土壌6
264	青磁碗底部	第1区	土壌6	310	陶器盤底部	第1区	近世土壌
265	青磁小碗底部	第2区	上層遺構面掘り下げ	311	陶器壺口縁部	第1区	上層遺構面検出中
266	青磁碗底部	第2区	近世東西溝	312	陶器壺口縁部	第1区	上層遺構面検出中
267	青磁碗底部	第1区	肥溜1	313	陶器壺口縁部	第1区	下層遺構面土壌
268	青磁碗口縁部	第1区	上層遺構面検出中	314	陶器盤底部	第1区	土壌6
269	青磁碗体部	第1区	上層遺構面検出中	315	陶器壺体部	第3区	井戸6
270	青磁皿口縁部	第1区	下層遺構面検出中	316	陶器壺体部	第3区	炉群A周辺
271	青磁皿底部	第1区	下層遺構面検出中				

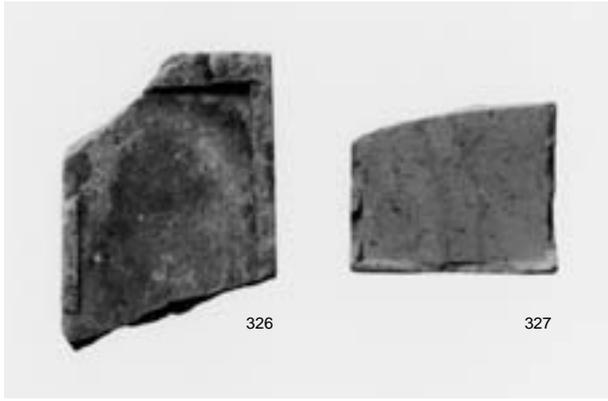


図13 石硯

## 2) 石製品 (図13、図版26)

石製品では、滑石製鍋、硯、砥石が多く出土したが、明確な遺構に伴うものは少ない。出土地点については表4で金属製品などとともを示しておく。

石鍋は細片化したものばかりであり、意図的に割られて再利用されている。とくに、資料(317)は底部付近の破片を成形して硯に変えているようである。また、破面が摩り減

って滑らかになっているものは、温石として再利用されたのであろう。資料(324)の底部片は被熱のため煤が鍋底に付着しており、煮沸に使われたことを良く示している。

硯は小型石硯が2点出土している。資料(326)は幅5.2cm、残存長約7cmで、裏面が剥離しているため厚さは不明である。陸部から海部にかけての破片であるが、非常に使いこなされており、陸部が大きく摩り減っている。資料(327)は陸部の破片で、幅5cm、残存長約4.1cm、厚さ1.7cmである。

砥石は幅約3cm前後の規格性の強いもの(328~330・333・334)が多く出土している。また、彫刻刀のような刃物を磨いた痕跡が残る資料(332・333・336)があり、青銅製品の生産との関係で注目すべき遺物である。大型砥石(335・337・338)もよく使われており、後述する鉄製品の短刀などを磨いたものかもしれない。

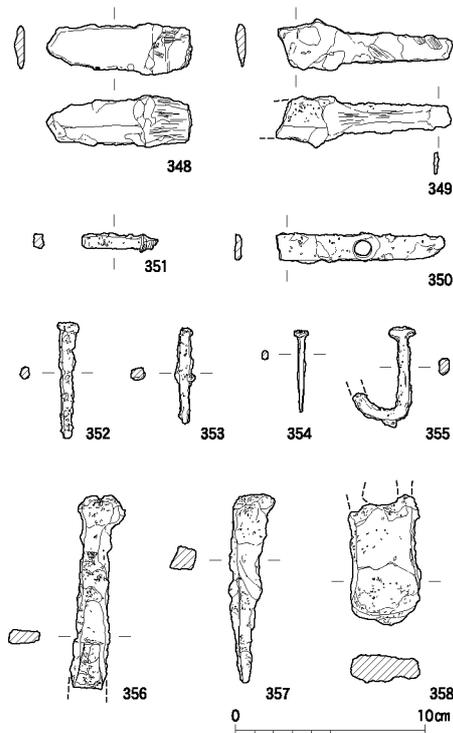


図14 鉄製品実測図(1:4)

## 3) 金属製品 (図14、図版27)

金属製品は渡来銭、青銅製飾り板、短刀や釘などの鉄製品が出土している。個々の出土地点については表4で示している通りである。渡来銭は唐銭の「開元通寶」(339)のほか、北宋銭の「皇宋通寶」(340)・「元豊通寶」(341)・「祥符通寶」(343)・「治平元寶」(344)・「政和通寶」(345)、南宋銭の「淳熙元寶」(342)・「皇宋元寶」(346)が出土した。資料(347)は長辺2.2cm、短辺1.3cmの薄い青銅製の飾り板で、表面に毛彫りを施し金箔を貼っている。断面は緩やかなカーブを描いており、太刀の鞘拵えに使われた樋板の破片と考えられる。

鉄製品は短刀(348~350)、小型工具(351)、釘(352~355)、鑿(356)、楔(357)、鎚(358)、針金塊(359)などが出土した。短刀(348・349)は刃部

から柄にかけての破片である。資料(348)は残存長7.6cm、刃部幅2.4cm、柄部幅2.6cmで、柄部には木質が残っている。刃部は片面が平坦で、もう片面には刃を研ぎだす稜線が残る。資料(349)は柄部が腐朽し中子のみとなっているが、木質が茎にへばりついている。残存長9.1cm、刃部幅2.7cm、中子幅は刃部よりで1.5cmである。刃部の形態は資料(348)と同じである。資料(350)は茎破片で、残存長8.7cm、幅1.3cmである。中央に目釘がそのまま残っている。資料(351)は彫刻刀のような小型工具の破片である。柄部には木質が残り、本体部は長片5mm、短片4mmの断面長方形を呈する。残存長は4cmである。釘(352)は残存長6.1cm、釘(353)は残存長5.1cmで、ともに先端部は折れている。断面方形の釘で、頭部は打ち込みのため潰れている。釘(354)はやや小型の釘で完存し、長さ4.2cmである。釘(355)はやや大型の釘だが、折れ曲がり先端が折れている。鑿(356)は残存長10.2cmで、先端が折れている。頭部は打撃痕跡で潰れている。楔(357)は長さ9.9cmで先端が尖る。頭部は鑿と同じように打撃痕跡で潰れている。鎚(358)は残存長6.6cmで、断面長方形を呈する。柄を差し込んだ穴の痕跡が割れた部分に観察できる。資料(359)は表面を観察すると、細かい針金が重なっているのがみえる。おそらく、針金を巻いたものがそのまま埋没し、土中で鉄の塊となったものと考えられる。

#### 4) 鑄造関係遺物(図15~17、図版12・28~32)

油小路に面した第3区や、第2区あるいは第1区西端部から鑄造関係遺物が多く出土した。これらには鑄造過程で使用された坩堝や鑄型、滓などがある。

坩堝には口径7.8cmの小型のもの(360)と口径13.3cmのもの(361)があり、ともに2箇所の注口をもつ。前者は土壌3から、後者は土壌5から出土した。また、土壌3からは鉦などの鑄型粗型を坩堝に転用したもの(362)が出土しており、土師器皿の転用坩堝も第2区や第3区の上層遺構面掘下げ埋土(364・365・367)や井戸7(363・366)、炉3(368)などから出土している。これらの内側には銅滓が多く付着している。その他、吹子羽口や溶解炉壁などの銅細工に伴う構築物破片も多く出土しており、羽口(371)は第2区の上層遺構面掘下げ埋土から出土したものである。

また、当地では鑄鉄も行っていたようで、土師器に入れられたまま固まった鉄塊(369・370)が土壌11から出土している。資料(369)は土師器皿、資料(370)は土師器丸底小型鉢を転用していたことが形態からわかる。分析をした結果、両資料とも純度が99.7%以上の鉄であることが判明した。鑄鉄に伴う遺物は鉄滓(416~425)が各所から出土しており、炉底の形態を示す資料(425)もある。鉄滓の出土地点は表4に示すが、当地周辺で銅細工とともに鑄鉄が行われていたことを示す重要な資料といえる。

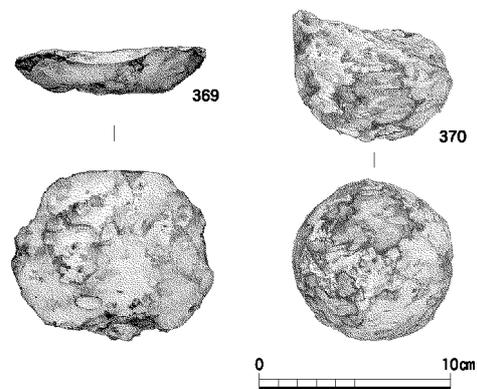


図15 土壌11出土土師器鉄塊実測図(1:4)



図16 鑄造関係遺物（坩堝・羽口・炉構築材）

鑄型は出土遺構によってそれぞれ種類の異なるものが出土する傾向にある。土壙3からは兜金（372）・鞘尻金物（373）・足金物（374～378）などの刀装具鑄型がまとめて出土した。炉3および周辺からは、2本を一度に作りだす筭鑄型（393・394）とともに、用途不明の飾り板（395～400）が多量に出土している。これらの鑄型の特徴は、表面はきめ細かい真土で形つくるが非常に薄く、スサを多く含む本体の粗型と一体化している点である。後述する鏡や器物の鑄型のように重層的な構造が明確でなく、原型踏み返して鑄型を製作したと考えられる。雄型と雌型の合わせ目として、刀装具鑄型の端部にはヘラによる刻み目や工具面を当てた凹みが確認でき、筭鑄型と飾り板鑄型には雄型には突起があり、対応する雌型には同一位置に凹みが明瞭に残っている。これらの事実は、鑄型粘土が柔らかい段階で踏み返しをして鑄型を製作したことを裏付けている。この他、踏み返し鑄型として、私鑄銭鑄型（401～407）が第3区から少量出土している。



図17 刀装具鑄型側面刻み目

鏡鑄型は第3区の土壙5から多く出土した。あらかじめ製作していた粗形の上に真土を塗って重層的に鑄型を作っており、真土の部分が剥離する資料が多い。<sup>2)</sup>資料（379・380）は鏡背面鑄型で、文様部（384～392）はすべて細かく割れて剥離していた。文様は篋押しによる秋草文や亀甲文で和鏡の型式として13世紀に遡る資料であり、土器からみた年代観と矛盾はない。資料（380）から推定

すると径約11cmの和鏡が製作されたと考えられる。資料(381)は鏡面鑄型で、真土は回転によって平坦に塗られているだけである。やはり、真土部の剥離が著しい。粗形の推定径が約19cmと、やや大型な鏡製作に使用されたものである。資料(382)は真土部が完全に剥離した粗形で、真土付着面に初殻痕跡が観察できる。なお、資料(383)は方形鏡の大きな粗形を割って再利用しており、側面に方形鏡粗形の中心に穿たれた穿孔の痕跡が残っている。方形板状製品を製作した鑄型であるが、鑄型縁が巡っており鏡鑄型とは構造が異なっている。

鏡と同様に重層的な構造をもつ鑄型が、器物鑄型である。資料(408~410)は小椀鑄型の外型で、製作された小椀の口径は約10cmである。炉群Aの東に堆積した炭層から出土した。資料(411~415)は提(ヒサゴ)の鑄型である。内型(411)は粗形の表面にきめ細かい真土を挽き型でなで付けて仕上げる。粗形内面は粗いナデ調整の痕跡が残る。外形(412~415)も粗形の内側に挽き型で真土を成形して仕上げており、内型ともに真土部の剥離が著しい。資料(411)が第3区炉群A地業出土、資料(413)が第1区近世土壌から出土しているが、その他(412・414・415)は井戸6から出土している。

#### 5) 瓦塼類(図18、図版32)

瓦の出土は非常に少なく、軒丸瓦は巴文軒丸瓦(426・427)が第1区上層遺構面と下層遺構面検出中に、軒平瓦は連巴文軒平瓦(428)が井戸3から、唐草文軒平瓦(429)が第3面上層遺構面検出中に出土したにすぎない。資料(426~428)は平安時代後期の軒瓦で、資料(429)は室町時代のものである。

塼は全調査区で多く出土しており、2類5型式の分類が可能である。1類は厚さ5cmと厚手で細長く、上下面が型によって窪められたものである。表面には縄叩きが明瞭に残り、2箇所の穿孔がなされる。幅10cmほどの1A型式(430~432)と、幅11~11.5cmの1B型式(433・434)、幅12.5~13cmの1C型式(435・436)に細分できる。2類は厚さ2.5~3cmの薄手のもので、表面は平坦で丁寧にナデ調整が施される。幅12cmで端部にホゾ状の切り出しがつく2A型式(437・438)と、幅広く穿孔が施される2B型式(439)に分かれる。1類と2類が共存して使用されていたことは、1A型式(430・431)と2A型式(437)が井戸3から共伴して出土したことから十分推測できる。おそらく、使用目的に応じて様々な規格の塼が使われたものと考えられる。なお、個々の出土地点については表4の通りである。

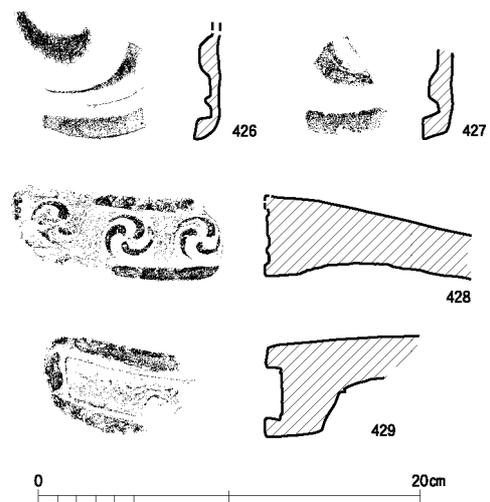


図18 軒瓦拓影・実測図(1:4)

表4 石製品・金属製品・鉄滓・埴出土地点表

No.	種類	地区	出土遺構	No.	種類	地区	出土遺構
140	石鍋口縁部	第3区	井戸6	348	短刀	第3区	上層遺構面掘り下げ
317	石鍋(硯転用)	第1区	上層遺構面掘り下げ	349	短刀	第3区	炉1
318	石鍋口縁部	第3区	上層遺構面検出中	350	短刀	第3区	炉1
319	石鍋口縁部	第3区	建物4整地土	351	小型工具	第3区	炉群A地業
320	石鍋口縁部	第2区	上層遺構面検出中	352	釘	第3区	炉群A地業
321	石鍋口縁部	第3区	井戸5	353	釘	第3区	炉群A地業
322	石鍋口縁部	第3区	上層遺構面土壌	354	釘	第1区	土壌4
323	石鍋口縁部	第3区	上層遺構面掘り下げ	355	釘	第3区	炉1
324	石鍋底部	第1区	下層遺構面検出中	356	鑿	第1区	下層遺構面土壌
325	石鍋底部	第3区	上層遺構面掘り下げ	357	楔	第3区	上層遺構面検出中
326	石硯	第3区	井戸7	358	鎚	第3区	炉群A地業
327	石硯	第1区	下層遺構面ピット	359	針金塊	第3区	井戸5
328	砥石	第3区	上層遺構面掘り下げ	416	鉄滓	第1区	土壌10
329	砥石	第3区	井戸5木枠内	417	鉄滓	第3区	土壌11
330	砥石	第2区	上層遺構面掘り下げ	418	鉄滓	第2区	上層遺構面土壌
331	砥石	第3区	炉群A地業	419	鉄滓	第3区	炉群A周辺
332	砥石	第2区	近世東西溝	420	鉄滓	第3区	土壌11
333	砥石	第3区	炉群A地業	421	鉄滓	第2区	上層遺構面掘り下げ
334	砥石	第3区	炉群A地業	422	鉄滓	第2区	上層遺構面掘り下げ
335	砥石	第3区	下層遺構面土壌	423	鉄滓	第3区	土壌11
336	砥石	第2区	下層遺構面土壌	424	鉄滓	第3区	上層遺構面土壌
337	砥石	第3区	土壌13	425	鉄滓	第1区	溝2
338	砥石	第3区	炉群A周辺	430	埴	第3区	井戸3
339	開元通寶	第3区	上層遺構面土壌	431	埴	第3区	井戸3
340	皇宋通寶	第3区	下層遺構面土壌	432	埴	第1区	下層遺構面検出中
341	元豊通寶	第3区	井戸7	433	埴	第1区	上層遺構面土壌
342	淳熙元寶	第1区	近世土壌	434	埴	第1区	上層遺構面検出中
343	祥符通寶	第3区	上層遺構面検出中	435	埴	第1区	下層遺構面土壌
344	治平元寶	第3区	上層遺構面土壌	436	埴	第1区	下層遺構面土壌
345	政和通寶	第3区	井戸7	437	埴	第3区	井戸3
346	皇宋元寶	第3区	建物5柱穴	438	埴	第3区	上層遺構面掘り下げ
347	青銅製飾板	第3区	下層遺構面土壌	439	埴	第3区	井戸7

註

- 1) 平安京編年については以下の論文を参照としている。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

- 2) 鏡鑄型の構造については以下の文献を参照。

網 伸也「和鏡鑄型の復元的考察」『研究紀要』第3号 同上

## 5.まとめ

今回の発掘調査は狭い調査区ながら、平安時代後期から中世にかけての町の変遷や、具体的な生活の様相を良好に把握することができたといえる。ここでは発掘調査の所見を遺構と遺物の観察から述べ、今後の問題点を提示しておきたい。

平安京の町の分割基準として四行八門の区画単位の存在が想定されているが、実地において分割原理がどのように働いているか考古学的に明らかにする必要がある。今回の調査の場合、平安時代中期以前の明確な遺構は少なく、平安時代後期から鎌倉時代になってようやく人々の活発な生活痕跡がみられるようになる。おそらく、このとき宅地分割は最小単位に近いかたちで分割されたと考えられるが、下層遺構面の建物1と柵2の西端や柵3の東端が西一行と西二行の境界に一致することは偶然ではないであろう。すべての宅地分割が四行八門に整然と規制されているわけではないが、分割の目安として中世まで四行八門が意識されたことは十分想定できる。それは上層遺構面の遺構配置においても、建物2の空間への入り口がやはり西一行と西二行の境界にあることや、油小路から町内に延びる東西辻子が新たに設置され、その基準が北三門と北四門の境界線にあることをみれば明らかであろう。

ここで注目できるのが、八条院町の中心地である左京八条三坊六町の調査成果である。室町小路に面して東西棟建物群が南北に整然と並んでいるが、町の南北中心である北四門と北五門の境界に東西辻子が設けられ、西三行と西四行の境界で辻子南柵が南に折れて室町小路面の建物群と町中央部の建物を区画している<sup>1)</sup>。明らかに四行八門の区画基準に規制されている様子が遺構から読み取れるのである。中世における町内分割に四行八門の遺制が認められる事実は、平安京条坊制に基づく宅地分割体系を崩壊させることによって、町屋を中心とする新たな中世的都市空間を現出させたとする従来の考え方に再考を迫るものである。

しかし、八条院町周辺では平安時代後期以前の遺構は散在的であり、平安時代末期から鎌倉時代になってはじめて都市空間が形成された経緯を重視すべきである。つまり、左京四条以北のように平安時代前期から頻りに班給が行われ、宅地の分割・変遷が激しい地域では、古代的な宅地分割基準が打ち破られることによって中世的都市空間が形成される。これに対し、左京八条域のように京内でも空閑地として取り残された地域では、新たな都市開発が行われるときには合理的な分割基準である四行八門が取り入れられたのではないだろうか。古代都市平安京の崩壊から中世都市京都への発展モデルを一元的に適用するのではなく、同じ京内でもそれぞれの地域における歴史的な経緯を念頭において、中世的都市空間の形成過程を考えていかなければならないであろう。

また今回の調査で、十五町内における油小路面と中央域での宅地利用の実態が明らかになっている。前述したように12世紀後半以降になって町内が宅地分割されるが、当初は京内における小規模宅地分割と外見上ほとんど変化がみられない。調査区は柵2・3と西一行・二行境界で大きく4分割されるが、それぞれの宅地で井戸が散在的に設けられており、それぞれ独立した宅地を

構成していたことが窺える。ただ、油小路面の宅地は銅製品の生産を開始していたようで、北西宅地内の土壌5からは鏡鑄型が、南西宅地内の土壌3からは刀装具鑄型が多量に出土している。これら油小路面の宅地の建物が、どのような構造であったか興味深い問題であるが、現状では不明である。あるいは町屋的な建物群がすでに形成されていた可能性もあるが、町中央域にも古代的な小規模宅地が存在したことは間違いないであろう。

ところが、14世紀頃になると明らかに油小路面の宅地と中央域では、その性格が異なっている。油小路面では確実に町屋構造の建物が小路に面して建てられており、建物の奥で鑄造炉を伴う銅製品の生産が行われ、井戸は建物のすぐ東側（奥側）に南北に並ぶように穿たれるようになる。このように銅細工などの職能民が盛んに活動している様子は八条坊門小路面でも確認されており、当地域が中世都市京都における経済活動の一つの拠点となっていたことを裏付けるものである。

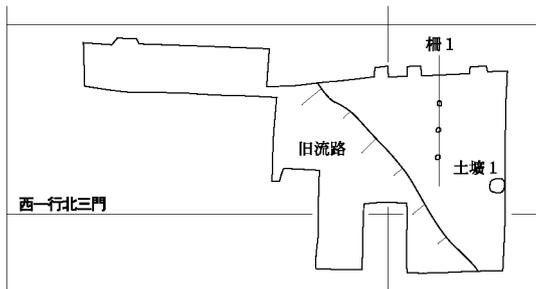
これに対し、町の中央域では中世建物として一般的な構造をもつ建物2が建てられた。建物は広い土間をもち、埋甕は水甕として機能したのであろう。また、南の畠との境には置き石が据えられ、屋外での多用途で使用されたと考えられる。広い土間をもつ建物での生活や畠を伴う屋外での生産活動などは、この場所において都市的空間とは異なる光景が展開していたことを物語っている。東西辻子はこの中央域へ通じる路として設置されており、同一町内で小路面と中央域が全く異なった性格を呈するようになるのである。このような同一町内での様々な階層による居住空間の住み分けは、当地域での特殊性とは考えられず、中世京都における一般的な姿を反映していることも十分予測できる。今後の他の地域における発掘調査によって、具体的な中世京都の土地利用の実態を明らかにしていく必要がある。

なお、図19にこの調査地での遺構の変遷を発掘調査の所見から概念的に示しておく。室町時代前期は遺構が複雑に切りあっており、遺物の年代観からは厳密にわけることができないが一応3つの小期に分けておいた。つまり、油小路に面して建物が建てられるとともに、溝1・2の掘削によって町内に通じる辻子が成立しはじめる段階、辻子の成立に伴い町内中央域に建物群が造営される段階、そしてこれらの建物群が衰退し土壌7・8のように墓域として利用される段階である。その後、室町時代後期には町が衰退し16世紀末の本願寺の成立まで畠地としてしか土地利用がなされなかったようである。

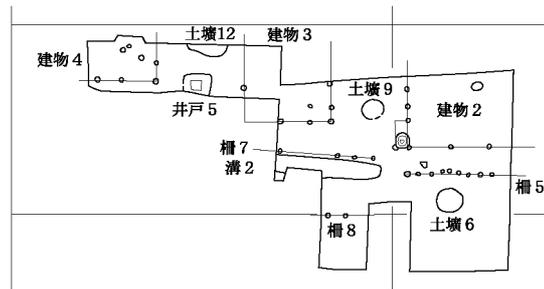
次に遺物の様相であるが、一括資料として興味深いのは、土壌2の平安時代末期の土器群と土壌9の室町時代の土器群である。土壌2では京都系土師器とともに尾張系山茶碗が完形の状態で出土しており、当町の活性化する時期の遺物群として注目できる。また、土壌9の遺物は京都系土師器の皿とともに瀬戸内系の高台付き土師質土師碗や在地系土師器小皿が共伴しており、瓦器も小皿しか出土していない。当地に居住した人々の性格を知るうえで重要な資料となる。

鑄造関係遺物としては、油小路に面する土壌5からは鏡の鑄型が多く出土するのに対し、第2区で検出した土壌3からは刀装具の鑄型が集中して出土する。このように遺構によって鑄型の種類が異なってくるのは、同じ油小路面の宅地であっても場所あるいは時期によって集中的に生産した銅製品が異なっていたことを示している。また、以前から指摘されていたことではあるが、

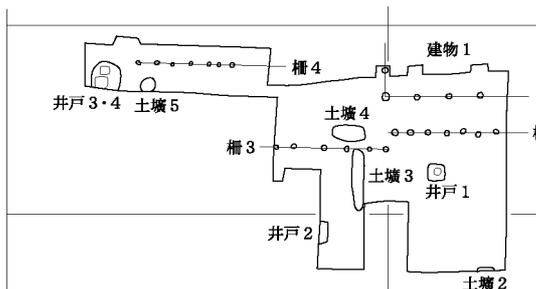
平安時代中期以前



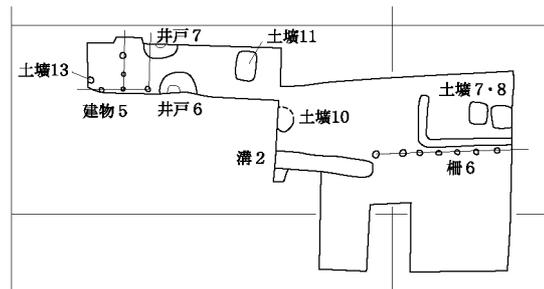
室町時代前期 (2)



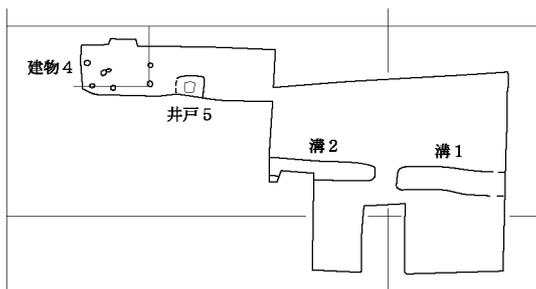
平安時代後期から鎌倉時代



室町時代前期 (3)



室町時代前期 (1)



室町時代後期

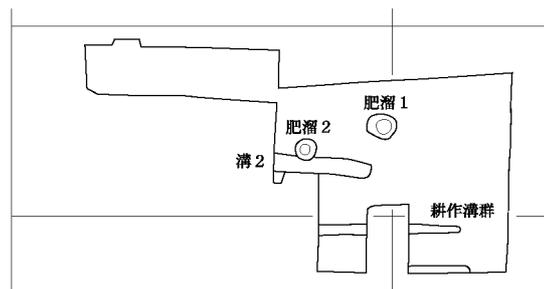


図19 遺構変遷図 ( 1 : 600 )

生産するものによって鑄型の作り方が異なるのも重要な所見といえる。

鏡や器物などの鑄型は、あらかじめ鑄型の基礎となる粗型を製作し、真土を粗型に載せて挽き型で成形する。挽き型を利用するため、逆に粗型には規格性が求められ、同じ大きさの製品を多量に生産することができる。ただ、鏡などは同じ規格であっても真土の上からヘラ押しで独自の文様を刻むことができるため、バラエティに富んだ作品を生産することができる。また、鑄型が重層的な構造となっているため、真土が剥離しても粗型が壊れないかぎり、粗型を再利用して何度でも鑄型を製作できるという利点もある。

これに対し、刀装具や筭の鑄型は粗型粘土が柔らかい段階で表面に真土粘土を塗り、原型を挟み込んで鑄型を成形するため、真土と粗型粘土が一体化した構造となる。また、雄型と雌型が一对で一つの製品を作るために、鑄型側面には合わせ目の印を個別に付している。今回出土した刀装具鑄型や筭鑄型では、側面の刻み目や突起と凹みが一对の鑄型を認識する目印となっていたの

であろう。そして、おそらく一回の鑄込みで鑄型は破損し、再利用にはあまり適さない構造であったと考えられる<sup>2)</sup>。

この他、土壙11からは鑄鉄関係の遺物が出土しており、土師器を坩堝に転用して溶鉄を汲んだ状態のまま、冷えて固まった鉄塊も出土している。銅製品の生産とともに鉄製品も鑄造で生産していたことを示す資料である。鑄鉄での生産品は明らかでないが、八条院町で鑄鉄が行われていたことが初めて考古学的に明らかになった重要な所見である。ただ、鑄造関係遺物から想定できる生産物は小物であり、実際に炉跡遺構も小型炉であることから、鑄鉄も一時的に小物を生産したものと考えられる。生産の主体は八条院町の様相と同じように、銅製品の生産が主体だったのであろう。

#### 註

- 1) 網 伸也・山本雅和「平安京左京八条三坊の発掘調査」『日本史研究』第409号 1996年
- 2) 鏡鑄型における鑄型の踏み返し製作と、粗型上に真土を塗る製作の違いについては、以下の拙稿で論及しているので参照されたい。  
網 伸也「発掘調査から見た頼通伝領前の高陽院」『研究紀要』第5号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうにぼうじゅうごちょうあと							
書名	平安京左京八条二坊十五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-15							
編著者名	網 伸也							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年4月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 はちじょうにぼう 八条二坊 じゅうごちょうあと 十五町跡	きょうとししもぎょうくあぶら 京都市下京区油 のこうじどおりきつやばし 小路通木津屋橋 さがるきたふんどんどうちょう 下る北不動堂町  522番1	26100		34度 59分 04秒	135度 45分 25秒	2003年11月 10日～2004 年2月19日	350㎡	マンション 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 八条二坊 十五町跡	都城	平安時代中期 以前  平安時代後期 ～鎌倉時代  室町時代	柵、土塙、旧流 路  建物、柵、井戸、 土塙  建物、埋甕、柵、 溝、路面、井戸、 土塙、炉、肥溜	土師器、須恵器、黒色土 器、白色土器、緑釉陶器、 灰釉陶器、土馬、銭貨  土師器、白色系土器、瓦 器、山茶椀、焼締陶器、 輸入陶磁器、石鍋、石硯、 砥石、銭貨、青銅製品、 鉄製品、鑄造遺物、瓦埴  土師器、白色系土器、瓦 器、山茶椀、須恵器、焼 締陶器、輸入陶磁器、石 鍋、石硯、砥石、銭貨、 鉄製品、鉄塊、鉄滓、鑄 造遺物、瓦埴		油小路に面して、 鏡生産や刀装具生 産など銅細工師の 活動の痕跡を確認 した。 中世においてもあ る程度四行八門に 規制されて、土地 区画や辻子などが 形成されているこ とが判明した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-17

## 平安京左京八条二坊十五町跡

発行日 2004年4月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961